

愛媛大学教育学部

第 107 号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



愛媛大学教育学部同窓会役員一同

『源氏物語』

千年紀によせて

同窓会副会長

村上 朋子 (昭三九卒)

一千八百八年は世界最古の長編小説『源氏物語』が歴史に登場して千年という節目の記念すべき年。名付けて「源氏物語千年紀」。日本が世界に誇る古典文化を再評価し次世代へ伝えようと様々な取り組みが各地で展開された。

なぜ千年紀なのか。それは、作者紫式部が書いた『紫式部日記』の中、寛弘五年霜月のついたち(二十八年十一月一日)に「左衛門の督『あなかしこ。このわたりに、若紫やさぶらふ』と、うかがひたまふ。源氏ににるべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむと、聞ききたり」という記述がある。これによりこのころには少なくとも『若紫』の帖までは書かれていたことの証左となっている。二千八年を「源氏物語千年紀」としたのはこの日記の存在によるものである。戯れ

でこの台詞を紫式部に投げかけた人物は、和歌、漢詩、管弦に秀でていた有名な藤原公任である。千年紀を迎えた『源氏物語』が今ブームだ。現代語訳の本が売れ、特別企画展や講座、講演会等の企画がめじろおし。何が人々の心を『源氏物語』に向かわせるのだろう。二か月で九回の講演をされたという教授は、「今までにない会場の熱気に驚いた。『源氏物語』は世界に誇る文学史上の最高峰とされている。しかし、現代語訳でも全編を読み通してない人は多い。そんな漫然としたコンプレックスがある一方で、この千年紀が、向学心と柔軟性を併せ持つ団塊世代の退職時期と重なったのも大きいのではないか」と話されている。

『源氏物語』が記録に現れて千年。紫式部が生んだ五十四帖の王朝絵巻は人類最古の恋愛小説として、今なお読み継がれ、国際的にも高い評価を受け、輝き続けている。人はなぜ、この長編に魅せられてきたのだろう。作者は千年の時を越えて、我々に何を語ろうとしているのだろうか。その魅力に少しでも触れてみたいと、私も例に漏れず、この千年紀を機にぜひ原文で読もうと決心した。一人では挫折しかねないので、同好の士で月二〜三回のペースで音読会を始

めた。今までに桐壺と帚木を読み終えたところだ。有名な雨夜の品定め場面では、女三人よれば何とやらで：喧々諤々。さらに、読んで意見を戦わずだけでなく物語縁の地を訪ねようということになった。早速計画を立てる。紫式部縁の地や源氏物語の舞台となった所を数回に分けて訪ねることにした。

紫式部の邸宅跡といわれる盧山寺(京都市上京区寺町)と物語生誕の地石山寺(京都府宇治市治蓮華)、物語が展開される主な場所である京都御所を訪ねた第一回目の旅は、山科をスタートして、京滋府県境の音羽山からの大観を築しみ、東海自然歩道の緑を満喫して『源氏物語』を着想した石山寺までのハイキング。石山寺は紫式部が物語の構想を練るために七日間産籠したといわれている。聖武天皇の命を受けた良弁僧正が七四七年に開き、奈良時代から観音の霊地として信仰を集めた寺院。平安時代は貴族らの「石山詣」が盛んになり『源氏物語』の中にも度々登場する。紫式部が琵琶湖に映る十五夜の月を眺めていたところ、物語の一場面が頭に浮かんだといわれているという。国宝になっている本堂の「源氏物語の間」は江戸時代、参拝者に公開されるようになったとか。それから、平安絵巻の中心地京都御所から紫式部が『源氏物語』を執筆した盧山寺を経て、下鴨神社、上鴨神社へと至る葵祭の舞台を巡った。盧山寺は九三八年に京都北部に開かれ、応仁の乱や織田信長による比叡山焼き打ち等を経て一五七三年に現在地に移転して

いる。本堂からは平安朝の庭園の「感」を表現した「源氏の庭」を眺めることができる。桔梗の花が一際美しく咲いていたのが印象的だった。邸宅は曾祖父藤原兼輔(堤中納言)から父為時に渡り、紫式部はここで育って藤原宣孝との結婚生活を送り、夫の死後は娘と共に過ごし、『源氏物語』や『紫式部日記』を執筆した所といわれている。

表紙	松田 一
絵	松田 一
題字	元愛媛大学教育学部教授 菊川 國夫
「源氏物語」千年紀	(1) 村上 朋子
副会長	村上 朋子
心響	(2) 輝
「誇りと絆」	副会長 垂水 葉子
学部の今	(3) 輝
「研究室訪問」高橋治郎先生今日は〜	
「総合研究棟耐震改修工事中」	
「小中高等学校現場との連携を深めるSPP」	
「SPPのアシスタントをして」	松井 輝
表紙絵について	(7) (6) 輝
職場便り	
「子どもたちから学ぶもの」	
久万高原・明神小教諭 西田 千恵	
「学び続ける」	
大洲・平小教諭 谷口めぐみ	
「人を動かすのは言葉」	
北宇和・愛治小教諭 小林 剛	
「天下無敵」	
西条・丹原東中教諭 今泉磨衣子	
「勇気の言葉」	
今治・大西中教諭 井上 洋	
「今までを振り返って」	
八幡浜・大島中教諭 白石 美保	
「教える楽しさ・教わる楽しさ」	
愛媛大・附属中教諭 萩野さくら	
「日々の生活の中で」	
県立・今治東中等教諭 増田 稚子	
原稿募集	(15)(11)
文芸	
川柳	森貞 和雄
俳句句集「青柿千句集」より	平野 範里







誇りと絆

垂水 葉子 (昭四八卒)

一 百周年の東雲小学校

今年度四月から勤務している東雲小学校は明治四十一年に創立し、今年百周年を迎えた。十一月二日には、地域の人々、歴代の校長先生、東雲小に関わった教職員と保護者、卒業生と在校生が参加し、記念式典(全校児童による校歌合奏、百周年の歌披露)、タイムカプセル開封式、写真家松本紀生氏による講演が行われた。二十年ぶりにタイムカプセルが取り出された瞬間には卒業生から拍手と歓声が沸き起こった。中にある二十二年後の自分に宛てた手紙や作品を出席者一人一人に手渡すため、卒業年ごとに教室を開放し同窓会の場として提供した。この日のために県外から駆けつけた人も沢山いて同窓会場は盛り上がりがあった。(私も

二十年前の教え子と再会し)黒板に書かれている在校生からの歓迎メッセージに卒業生から返信が書き添えられている。「みんなの二十年後が楽しみやね。きつとうれしくて楽しいよ」「百二十周年も楽しんでください」「楽しかった。ありがとう。卒業生より」等々。卒業生と在校生の心が繋がる一コマである。午後からは「しのものめ百年祭」を開催した。(バザー、ゲーム大会、マンガリンバイレックス選手による餅のふるまい等)地域の人々、中学生、卒業生、在校生が一堂に会し、新たな出会いの場として交流の輪を広げていた。

この日に東雲小百年の歩みを綴った記念誌「誇りと絆」が完成した。これを作り上げたのが本校鈴木智光教頭(愛大昭五四年卒)である。東雲小に関わった人々からの投稿と、学校に残っていた資料がベースとなり、長い時間を費やして仕上げた記念誌である。卒業生の一人、Sさんが十一月二十日付愛媛新聞「へんろ道」に「東雲小百周年おめでとう」と題して投稿してくださっていた。「卒業名簿の中に二十代の若さで戦死した二人の弟の名前を見つけた祖父は感慨深げな表情である。二人の生きていた軌跡を見つけたような気がした。(中略)これからの日本を背負っていく子供たちが大人になったとき、平和な世の中が続いていることを切に願わずにはいられなかった。」Sさんの尊いお気持ちをしっかり受け止めたいと思う。(亡くなられた卒業生と教職員のご冥福を皆で祈りました。)

三百十二名である。「時は流れても変わらないものもある。いつの時代にも東雲つ子である、あるいは東雲つ子であったという誇りと絆をもって東雲小のよき風を守ってほしい。」と語っているのは百回目の卒業生となる六年生のNさんである。東雲小のよき伝統を再度確認しながら次の百年に向けて新しい一歩を踏み出すという大きな責任を感じている。

二 愛媛大学の力添えを得て  
道路を挟んで向かい合っているという地の利を生かし、愛媛大学と協力体制を取らせていただいている。現在学生八名に力を借りている。また、愛媛大学の先生方にたびたび来ていただき、本校の教育活動及び研修活動に対し献身的サポートをいただいている。教育の質の向上を目指すとき、教職員の資質向上が重要課題である。毎日の授業に学生が学習アシスタントとして加わっていることは新鮮な刺激となっている。どの学生も教員を目指している。そのひたむきな姿が、私たち教職員の情熱を取り戻させる。また本校では年間一回以上授業公開することになっているが、校内研究会のたびに大学の先生方に助言をいただいている。そのおかげで、学校中が活気づき、教職員の向上心が子供たちの学ぶ意欲につながっていると感ずる。東雲小の誇りの一つである。愛媛大学との連携により東雲小学校が得るものは計り知れなく大きい。この場をお借りしてお礼申し上げます。(日野克博先生、二宮衆一先生、白松賢先生には特にお世話になっています。ありがとうございます。)

三 絆  
高縄山の麓にある立岩小学校在任中は兵頭寛先生に毎年何回か陸上の指導に来ていただいた。(そのおかげで五、六年生合わせて十名の小規模校にもかかわらず県大会に二名も出場することができた。)フレンドシップ事業の一環としてトーンチャイムの演奏を聴かせてくださったのは愛媛大学教育学部音楽科の学生さんと田邊隆先生である。(音色にうつとり。卒業を祝う会に花を添えていただいた。)

愛媛大学教育学部の先生方は不利な地にある小学生のことも忘れていないこと、要請すれば遠い所まで駆けつけてくださる事実を知っていた。百周年記念式典に集まった卒業生と在校生が「誇りと絆」を合言葉に心通わせたように、愛媛大学教育学部同窓生が、平和で希望あふれる未来を実現させるため、絆を強めていくことを願っている。



20年前タイムカプセルに入れていた学級旗を持って、昭和63年当時(4の1学級担任)

(8) 791-0121 松山市湯の山 (六一一七)

- 絵手紙 宮内 久司
- 短歌 池上 馨
- 俳画「老後の楽しみ」 上窪田美鶴
- 「漢詩」伊予長浜八景(三) 豊嶋 睦
- 行くに径に由らず 林傳次先生遺稿集より(一) (18)
- 第十一回教育学部同窓会懇親会報告 先輩を偲ぶ(九) (21)(19)
- 故「森岡 数栄」先生 (九) 上甲 修
- T先生を訪ねて 重見 法樹
- 上岡治郎君を偲んで 伊藤 始
- 結婚相談 会員からの便り(一) (23)(22)
- シベリア慰霊追悼の旅 清家 政夫
- 同期会(一) (23)
- 「愛師 昭二十二年卒 第二十三回同期会」 島津 通幸
- 「無念の四五空 有終の記」 大野 政宣
- 「小クラス会」 龍山 敏子
- 「十回目の二九の会」 小野植元幸
- 教育学部から教育の現場へ: 教育学部サポーター制度(仮称)導入 (26)
- 愛媛大学オープンセミナー in東京が開催された: オープンセミナーに出席して 武田 文敏 (27)
- 教育学部同窓会ホームページを開設しています: 叙勲・受賞: (29)(28)(28)
- 支部活動報告: 伊予支部一はばたけ伊予の子: 支部トピックス: (33)(33)(32)(32)(32)(31)
- 会報送料・寄附者名: 寄附図書紹介: 会報発送と送料納付について: 敬 申: 放送大学生募集: (33)(33)(32)(32)(32)(31)

# 学部 の今

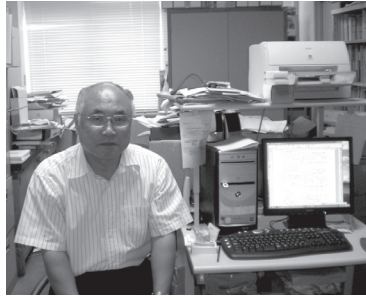
## 研究室 訪問

### 理科研究室

#### 高橋治郎先生今日は

厳しい残暑の中にも心なしか朝夕は涼しい秋の気配を感じる九月中旬、高橋治郎先生の研究室を訪問した。

先生は、平成十六年から四年間、愛大教育学部附属中学校長として活躍されていた。そこで、その経験を中心にお話を伺った。



**中学校教育から厳しい教育の現実を觀た**

校長に就任して、直ぐ痛感したことは、中学校の先生は超多忙の毎日をご過ごしているな、ということでした。早朝出勤して部活の朝練を指導し、その後、職朝、終わると学級、教科等の指導、放課後はまた部活の指導、その後生徒た

ちを帰した後、学校・教科等の研究会議、休日も、愛教研の世話役としての仕事と休み無く、それも夜遅くまで働いているのが現実でした。

また、子どもの気力、体力、運動能力、個性能力面から見ると、早くから進学関係のみに力を入れてきたからだろうか、ひ弱くなっている感じがします。それが学校行事をする中でよく分かりました。それは、活動もマニュアルがなければ自分で動くことしなしい。活動すると身体的な問題が多い。活動するの最たるものは、競り合いになると直ぐ投げ出すようなひ弱さを露呈する。そこには、親御さんの影響も含め、視野の狭い競争心と燃え尽き症候群の傾向が見え隠れしていました。

一方、親御さんも我が子の進学を中心とした学校への期待度も増してきており、我が子中心の近視眼的な学校や先生への要求が、それぞれの先生への大きな圧力としてのしかかっています。

校長をして沢山の経験とそれぞれの問題解決を図ってきた経験値からその解決の一つとして、学校内の先生と生徒、学校外の先生と

保護者、保護者間等における相互理解、相互扶助、協働精神の育成と実践力の醸成のためには、それぞれのコミュニケーションをいかに構築するかにあると痛感しました。

**大学学部・研究室からの活動**  
現在、高橋先生は愛大における理科教育推進の中心者として活躍され、地質学の権威として、南海地震や東南海地震をはじめとする、地震関係やそれに伴う防災関係について、県下はもとより、全国規模での研究、講演で超多忙な日々を過ごされているので、その内容と現況をお伺いした。

**〈地震研究と防災〉について**  
竹内均先生の「プレートテクトニクス」理論を紹介した本の影響を受け、中央構造線についての研究で学位をとったが、研究の中で愛媛県は地滑りや活断層が多いので、その調査研究を応用地質研究の関係で工学部の先生方と共同研究を進めている最中、阪神淡路大震災に遭遇しました。また、ネパールの大地滑りや崩壊のことで、JICAからネパールへの調査研究派遣要請があり、三名のチームを編成して四ヶ月間の調査研究をしました。芸予地震の時、愛媛大学全体で調査団を立ち上げ、また、二〇〇四年台風災害に対応し、その三年後、愛媛大学に正式に防災情報センターが設立されました。最近では日本各地で地震が頻発し、今は、災害関係の仕事が激増しているのが現状です。

**〈南海地震に備えるため〉**  
講演での私への質問の多くは、「南海地震がいつ頃起こるのか」ですが、私は「南海地震は九五〜一五〇年周期で起こっているの

で二〇五〇年頃と予測している」と答えています。

東海・南海地震が発生すると、六千万人位の人が被災するのではないかとわかっていまして、国を挙げての大規模防災対策が提唱されています。そこで、今は社会的な自助・共助努力での自主防災組織の編成が急務となってきました。

しかし、今の内に何をすべきかを考えたとき、今は昔のような「向こう三軒両隣」という良き互助精神は霧消し、生活スタイル、生活環境の激変からくるコミュニケーションの崩壊に伴う人間関係の希薄化の中、大規模地震が発生したときを思うと戦慄が走ります。だから、国を挙げてしなければならぬことは、コミュニケーションの再興、構築にあります。また、将来を担って生きている子どもたちをどのように安心・安全な社会の中で住まわせるかにもあります。子どもに生きる力というが、それは、自然災害から身を守るだけでなく、自身の護身力を身につけることも必要でもあります。

どの人も今は若いからと言ってもいつかは、災害弱者になってくるものです。だから、顔の見えない運命共同社会の現社会の中で、いかに安心・安全の社会を構築するかは、私たち一人一人の意識と実践的行動力の芽生えが、理科・地学教育と相まって急務となってきましたと言えます。

**今時の教育学部学生気質は**  
入学してくる学生で「是非とも先生になるぞ」との高い志をもっている学生は皆無に近いことを痛感させられます。目的をもったの

進学・進路ではなく、センターテストの成績によるだけの進路決定、先生や親が行けと言うから行くという無気力な決定で入学してきているのではないのでしょうか。また、先生に対する社会的な評価の低下と先生の大変さがいわれてきたためか、学生には教えのプロになろうとする意欲も気概も日々の生活態度からは見受けられません。

だから、入学しても、コピー社会、電子情報社会にとっぷり浸かり、創造的な生き方が観られないのが残念です。今なら十分時間とゆとりがあるから、しっかりと読書をして欲しいと私は学生に呼びかけています。学生には、卒業するまでの四年間に五百冊の本を読破して欲しいとも言っています。私の経験から、その読書はいつかどこかの自分の生活の過程で生きてはたらくものだと言っています。

#### 卒業生へメッセージ

今どのような立場にあらうとも、一生をかけて定着した仕事を安定的に得るための、将来への充電を続けてほしいということです。幸い、教育学部は多面的、多角的な学習ができ、百冊近い専門書を身につけるなら、大学では入門書的なものをどのように繋ぎ構成していけばいいかを学習しているわけだから、学生時代に素晴らしい出会いをしたであろう学友や恩師を大切に、常に訊ねて行く実践的姿勢が必要となってきます。前途に希望が見えにくい閉塞感のある社会であればあるほど、常に今日よりも明日へ成長していくこととする飽くなき向上心を失わないで欲しいと願っています。二



度とない人生だからこそ、読書からくる人生観でもって常に自問自答し成長する自分であって欲しいものです。

同窓会に望むことは

同窓会は基本的に在校生、卒業生の縦横の繋がりであり、面の構成がなければなりません。従って、同窓生が同窓会を運営するのになければならないと考えます。そこには、同窓生の提言があつての活動でなければならぬことです。同窓会員は、同窓会が自分達のために何をしてくれるかを求めるのではなく、自分達は同窓会に何ができるかを問い働きかけるものでなければならぬと思います。

卒業生の声が反映できること。同窓生からの提言があること。同窓生がまとまって活動する時間、場所の提供があること。基本的には、いかに教育学部の後輩に刺激を与えるかが、同窓会の一つの仕事であり、それを最優先する必要があるのではないのでしょうか。

今後解決すべき問題としては、同窓会会員の同窓会に対する偏見の打破。活動もじり貧の傾向への対策。校友会との摺り合わせ。来年愛媛大学開学六十周年記念行事への同窓会の取り組み等がありますが、問題は山積していますが、だからこそ今後の同窓会の発展に大いに期待しています。

先生との懇談はいつの間にか二時間を超えていた。引き出しの大量のお話は尽きることがなかった。それは、優れた科学者としての目と豊富な読書量からくる柔軟で幅広い人生観からくるものだと、先生を取り巻くアカデミックな雰囲気を感じ出している研究室

に私はしばらくいた。

追記

高橋先生も編纂に加わった  
「先人の教えに学ぶ『四国防災八十八話』」が最近発行された。



このことは、平成二十年十月十四日付けの愛媛新聞にも掲載された。

先人が残した災害の教訓を学んでもらおうと愛媛大防災情報研究センターと国土交通省四国地方整備局などが編纂し五千部がこのほど発行され、同センターのホームページでも公開されている。

公募などで集まった七百六話から昨年度、愛媛大など四国の五大学の研究者でつくれた検討委員会が一教訓生の高さを主眼に八十八話を選出。愛媛大が編集と発行を担当した。

この八十八話の冊子は一般配布はせず、愛媛大と共同で防災教育を実施する市町に提供されている。HPから自由にダウンロードもできる。

同センターのHPは

<http://www.ccr.ehime-u.ac.jp/dmii/>

総合研究棟(教育系)

(旧教育学部1号館)

耐震改修工事が

施工されている

一昨年の平成十九年度から地震対策のため、愛媛大学キャンパス内の総合研究棟総てを対象として、図書館を皮切りに耐震改修工事が行われている。

総合研究棟(教育系)(旧教育学部1号館)と教育学部2号館のうち2号館は平成十九年七月から

施工され、完成後平成二十年八月十日からは中枢機能がある旧1号館が改修工事に入った。完成は平成二十一年三月の予定である。

改修後、新しい設備としては、フーコー振子があつたところに、エレベーターが設置され、一、二、四階にそれぞれ、リフレックスルームができ、省エネを考慮して廊下に感知式照明や各室全てに網戸が設置される。

「フーコー振子」は何処へ  
改修前の教育学部1号館に入ると、昇降階段横、吹き抜け四階天井から吊り下げられた「振り子(フーコー振子(Foucault's Pendulum))」が、来客に存在を示すかの如く悠然と静かに円を描きながら動いている姿をいつも目にした。

来客は、この振子は慣性に従いつつも動いているものと見て取つたと思われるが、実は、S事務官が早朝出勤して手動にて動かしていたというエピソードがある。

1号館のシンボリックな存在でもあつたこのフーコー振子も、耐震改修工事では今後は2号館2階の片隅に収納されている。耐震の関係で、今後の行方は未定とのこと。



中庭からの改修工事風景



玄関からの改修工事風景



ちなみに、ここ(教育1号館)に設置されていた「フーコー振子」は、太さ約2mm、長さ約17mのステンレス線で、重さ50kgの鉛球を吊したものであった。

「フーコー振子」の謎

1号館に掲示されていた説明文より

地球が自転していることは、今では誰でも知っている。しかし、「どうして自転していると言えるかを説明せよ。」と問われたら、これに答えられる人が何人いるだろうか。「太陽や月や星が、毎日東から出て西に沈むのは、地球が西から東へと自転しているために起る現象である。」というのは、この問の答えにはならない。何故ならば、目で見るだけならば「太陽や月や星が実際に東から昇って西に没し、地球は静止している」と考えても少しも不都合ではないからである。

フランスの科学者フーコー(Foucault 1781-1868)は、次のようなことを考えた。すなわち、「自由に移動することができる振り子の振動方向(振動面)は、空間に対して、常に同一方向(同一面)を保つ性質がある。したがって、もし、西から東へ自転している地球上で、振り子を振らせれば、地球は、振り子の振動面に無関係に自転してゆき地球面と共に動くわれわれから見れば、振動面は、北半球では時計の針と同じ方向(南半球では反時計まわり)に変化するはずである」と。

そして、彼は一八五一年ナポレオン三世の厚意により、パリのパンテオン寺院の中に、太さ(直径)二四mm、長さ六七mの鋼鉄線で、重さ二十七kgの鉄球を吊し、下に直径四mばかりの盤をつくり、その上に砂を少量盛って、振り子が一回振動するごとに砂の上に痕を残すようにして、自分の考えを確かめた。

このように、地球自転の証明の目的のために用いられた振り子を、この実験を始めておこなったフーコーの名になんで「フーコー振子」といわれるようになった。

### 小中高の学校現場との連携を深める

## 「SPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト)事業」

### SPP事業の概要

#### SPPについて

様々な最先端の研究成果や研究施設・実験装置等を有する大学、公的研究機関、民間企業、科学系博物館、学会等と、小中学校や高等学校等の学校現場との連携により、児童生徒の科学技術、理科・数学に関する興味・関心と知的探求心等を一層高める機会を充実することを旨とする調査研究がSPPです。

現在、次の二つの枠組みにより実施されています。

#### ■SPP連携プログラム

研究者を教育現場に招へいして実施される実験等の講座、大学、研究機関等の施設、機材を活用して実施される講座及び教育委員会と大学、研究機関等との連携により実施される教員研修(平成十七年度全国で約七百件)に対する支援等を行うことにより、小中学校・高等学校等と大学、研究機関等の連携を推進しつつ、その適切なあり方について調査研究を実施しています。

#### ■SPP教育プログラム・教材開発

海外における大学、研究機関等との連携の実態や研究者の研究成果について社会へ発信するための手法等についての調査研究を実施します。

#### 学校現場でのSPP実践活動

#### ■八幡浜市立青石中学校生との理科実験交流

平成二十年八月十四日、SPP事業の講義型学習活動として、八幡浜市立青石中学校の生徒四十二



名が教育学部を訪れ、理科実験室等で生物の観察を行いました。

この取り組みは、青石中学校の三好美覚教諭から教育学部に協力依頼があつて実現しました。大学の施設と教員の専門性を活用して、中学校現場では体験できないような自然体験・科学体験をしてもらいたいというのが目的です。

教育学部で準備したテーマは、「植物(生物)の生殖」「植物(生物)の多様性」で、生徒は二班に分かれて、午前と午後で二種類の学習活動をしました。

「植物(生物)の生殖」では、花のつくりの観察、ホウセンカなどを使った花粉管の発芽実験、自分の細胞の観察、体細胞分裂の観察などを行いました。「植物(生物)の多様性」では、野外で、自分の採水した水を観察して、ミジンコ、ワムシ、アメーバーなどの微小生物を観察しました。また、花が咲かない植物であるシダの前葉体を観察して、放出され精子を観察しました。

一人に一台の顕微鏡が準備できたので、自分の目でじっくりと生物を観察することができました。午前と午後を通して四時間を超える活動になりましたが、参加した中学生は最後まで熱心に観察したり、観察できたものを写真に



撮ったりしていました。

学生食堂で昼食を食べる経験も含め、観察実験だけでなく、中学生は大学キャンパス内でのいろいろなことを見聞できたようです。

生物実験の準備と指導は、大学教員二名が対応しましたが、ティーチングアシスタントとして五名の大学生が協力しました。大学生にとつても中学生と直に触れあう良い機会になったようです。

#### ■松山市立東中学校「職業科」理科コースを教育学部で開催

松山市立東中学校が「総合的な学習の時間」に実施している「職業科」の理科コースが、教育学部の理科教育実習室などで開催されました。平成二十年度で三年目の取り組みになります。

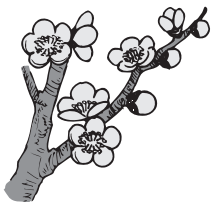
ここでは理科教育講座の教員が総出でそれぞれの専門性を生かし

ながら科学実験をしたり、科学と職業の話をしたり、大学生との交流を計画し実施しています。

また、中学生が理数に関連した職業をイメージするうえで基礎となる体験をしてもらうことを大切に行っています。前学期には二年生二十名が、

- ① 科学の世界への誘い
- ② 大地(地球)相手の仕事
- ③ 学ぶということ——化石や堆積物の観察を交えながら
- ④ 科学と芸術——「見えないもの」を「みる」
- ⑤ ナイロンをつくってみよう
- ⑥ 岩石・地球のつくりと歴史を伝える宝物
- ⑦ 色をつくろう
- ⑧ 大学生との交流会

という内容の授業をしました。科学との出会い、人との出会いが中学生の職業に対する意識に何らかの影響を与えられることを期待しての事業です。十月からは理科コースの後半の授業が行われました。





# SPP事業の アシスタントをして

四回生  
松井 輝

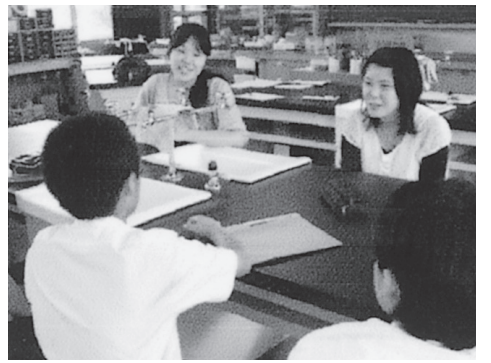


二〇〇八年八月、私はSPP (Science Partnership Project) 事業のアシスタントとして、八幡浜市立青石中学校の生徒四十二人と理科実験室等で生物の観察をしました。この取組は青石中学校の三好美覚先生が教育学部に協力を依頼したことで実現しました。中学校の教育現場では体験することのできない自然体験や科学体験を生徒たちに味わってもらおうというのが目的です。

私がアシスタントをする前に思ったことは、休日を利用して勉強をするために大学に行くほど理

科好きの生徒が果たしているのだろうか、ということでした。大学キャンパス内を楽しく回ることでできるオープンキャンパスに参加したり、地域スポーツクラブなどで楽しく運動したりするのはなく、理科室で顕微鏡を覗いて観察するという活動に、生徒が集まるのだろうかと感じていました。しかし、当日は四十二人も熱意ある生徒が参加してくれ、中学生の理科への関心の高さを感じ、嬉しく思うと同時に、一人でも多くの生徒に、もっと理科を好きになってもらいたいという思いになりました。

今回の活動は、生徒は二班に別れ、「感動のある細胞の学習」をテーマにした日誌教授の講座「植物の生殖」と渡邊准教授の講座「植物(生物)の多様性」を午前と午後で受講しました。「植物の生殖」では、花のつくりの観察やハウゼンカなどを使った花粉管の発芽実験、体細胞分裂の観察、自分の口の中の細胞の観察などをしました。「植物の多様性」では野外の水槽や水溜りなどの水を採取・観察し、ミジンコやケイソウなどの微小生物を観察しました。各講座とも、授業よりも長い二時間の活動でしたが、生徒たちは集中力を切らすことなく取り組んでいま



私は渡邊先生の講座のアシスタントをしました。理科に興味のある生徒たちが集まっていることもあり、生徒たちから質問の音が絶えることがありませんでした。生徒一人に一台の顕微鏡がある物理的環境、じっくりと観察できる時間的余裕も、生徒が積極的に質問できるきっかけになっていたように思います。とりわけ、生徒たちが興味をもっていたのが、デジタルカメラによる顕微鏡写真の撮影でした。自分が見つけた生物を自分で写真に収め、学校で見ることができると知った生徒たちは、何種類の生物を見つけたことができるか、誰も見つけたことのない生物を見つけたことができたか、競い合うように観察していました。このような姿を目の当たりにし、私は生徒たちが、まるで小さな科学者のように感じ、「この生物の名前はなんて言うんですか？」などと、新しいことを知ろうとする好奇心旺盛な様子に驚かされました。

この事業を通し、私が感じたことは、子どもたちは環境によって、時間を忘れるほど理科に没頭することができるといことです。教育実習や地域連携実習など、様々な場面で実験を行っている子どもたちを見てきました。その中で感じたことは、子どもたちが授業中ずっと集中し続けることは極めて難しいということです。しかし、今回のSPP事業のように四時間を越えるようなものでも、引率を越えるようなものでも、引率してくださった三好先生の生徒に対する熱意や、大学の豊富な設備や教材が合わされば、集中を切らすことなく、楽しく学習することが可能だということがわかりました。

アシスタントとして参加した今回の活動で学んだ、中学校が大学と協力することのメリットの大きさや、生徒に対する情熱の大切さなどを忘れないようにしたいです。私が教員になったとき、生徒に新しい可能性を示すことができるといきたいと思います。

## 表紙絵について

### 「無題」



作者  
松田 一

図形的説明的な絵は描きたくない。音楽的詩的な絵を描きたいと常に思っていて、心象的抽象画を描く時は眼前に対象物はないから、言葉にならない強い内的事象(ショック=感動)を造形言語である点線面によるフォルム(形態)と色彩を使ってあれこれと試行を重ねて、自分が思い描いているイメージに可能な限り近づいたと思えたときにやむなく筆を置きました。それは丁度青い鳥を追い続けるとに似たようなもので、従っていつも未完成です。だから頭と手と眼が故障しない限り追い求め続けて行くでしょう。私にはこの小さな曲がりくねった凸凹道をわがままに歩いて行くのが性に合っていてとても心地よい生き道です。肩書きも無し、団体組織にも所属しておりません。アーティストは個から社会への問題提起的発進電波のようなものだと思います。

### 略 歴・(現在も含む)

- 昭36 愛媛大学教育学部卒業。高校美術教師となる。
  - 昭39 高校教職退職し上京(麻生三郎・洲之内徹に師事)
  - 昭43 帰郷、再度高校美術教師。この年より年一回の個展だけで発表を続け今年(二〇〇八)40回目となる。
  - 平11 退職。造形活動一筋
- (☎) 791-0212 東温市田窪二〇八二二

# 職場だより



## 子どもたちから 学ぶもの



久万高原町

明神小教諭

西田 千恵

(平九卒)

「大切にしてほしい」と周りにねだるだけじゃ変わらない。自分から大切にしていると、気付かないうちに大切にされてるから一人でできない幸せ。大切にしよう」

郡音楽発表会に向けて、全校児童二十三名で練習している合唱曲「みつけよう大切なもの」の歌詞の一部です。音楽主任ではあるものの専門ではなく、しかもあまり得意でない合唱指導は早々と曲選びから悩まされます。子どもたちの歌声を技能的に高めたいという思いはありますが、難しいことを考えないでみんながその曲を好きになり、楽しんで歌えるようになることが子どもたちにとっても

自分にとっても上達への第一歩と思ひ、選曲することにしました。まずは、聴いて覚えやすいメロディー、そしてメッセーj性のある歌詞というところから決めたのがこの曲です。この歌を通して、子どもたちが周りの人々と支え合って明るく優しく力強く前向きに歩んでいこうという気持ちを高めてくれればと願っています。

音楽といえば、楽器の指導もありますが、むしろこちらの方が本校の子どもたちは好きようです。「先生、夏休みにリコーダーで〇〇が吹けるようになりまし

た！」二学期が始まって早々、子どもからの嬉しい報告です。「なかなかやるねえ。」という私からの褒め言葉は耳に入ったのかどうなのか、その子は続けて言いました。「ほとんどどうまくいってるんだけど、一つだけ難しい指づかいの音があつて、そのせいで曲がスムーズにつながらないのがまだダメなんです。」なかなか自分に対して厳しい評価。でも、表情はとも自信に満ちていました。

この話を聞いて嬉しかったのは、苦手でなかなかうまくできなかったことができるようになったということがもちろん、練習することが楽しくなっている、夢中になって取り組んでいる、ということでした。その学年からすると難しい曲ですが、練習曲として楽譜を手渡したときからよっぽど気に入ってくれていたらしく、「練習しなければならぬ」というよりも、「練習してみよっかなあ」というような弾んだ気持ちでリコーダーを手にとっていたようです。こんな風に、子どもの充実した姿に出会ったとき、教師をしていて本当によかったなあと感じます。



勉強であれスポーツであれ何であれ、「やらされている」「やらなければならぬ」と、責任や義務を感じてしまうと、なかなか効率があがるものではありません。「楽しい」「やりたい」という気持ちがあるものでありません。「楽

がものごとを上達させたり長続きさせたりすることの原動力となっている」というのを、このリコーダーの話を一例として教育の場においてよく感じさせられます。「今日の算数、よく分かって楽しかった！」「もつとよまくできるよ

うになりたいな！」などという前向きな言葉を子どもたちからどんどん聞くことのできる現場であつたら、子どもたちも教師もどんなに幸せだろうと考えます。

て行動し、やり遂げる充実感というものを味わわせられていないように感じられました。そこで、また先の音楽発表会の話に戻ります

が、合唱とは別の合奏曲で、一年生だけの鍵盤パートを作ることになりました。二年生に頼りきりの一年生でしたから、不安がるかもしれないと思いきや、それはもうはりきって練習に取り組みました。そして初めて全校で集まって合奏をしたときには、自分の演奏が入ってこそ一つの曲になるということを実感でき、思い切り楽しめたようでした。

こんな子どもたちを見て思うこと、それは「経験は宝、可能性は無量大」。これくらいできれば十分：などといった枠にとらわれず、何事も根気よくチャレンジすることによって大きなものを得ている子どもたち。そうやって日々成長していく子どもたちの様子を目の当たりにして、自分も努力を惜しまない教師であり続けたいと奮い立たされます。

☎ 791-1221

久万高原町露峰

二五一四一一

現在、私は一・二年生八名の学級担任をしています。不慣れな複式学級、しかも入門期の一年生を含むとあつて、初めはどうすればいいものかと悩むところもありました。しかし、すぐその心配は無用のものとなりました。しっかりと者の二年生にちゃんと一年生はついて行くのです。ただ、この複式学級で過ごすこと数か月、課題も見えてきました。ますますしっかりとってきた二年生とは対照的に、そんな二年生にまだまだ依存している一年生。自分たちだけで考え



## 学び続ける



大洲市  
平小教諭  
谷口めぐみ  
(平十六卒)

今年四月、新規採用教員として大洲市立平小小学校に着任しました。私は、五度目の挑戦で採用試験に合格することができました。合格を知った時の喜びと不安、胸の高まり……。言葉ではうまく表現できない感情を今でも時々思い出します。

「今年こそは。」と試験勉強に取り組みましたが、合格できずに落ち込む日々もありました。しかし、私のまわりには、私を支えてくださる大学や現場の先生方、同じ目標をもつ多くの仲間がいました。地元の公民館の一室を借り、採用試験の勉強会を三人で始めました。討論や面接の練習を行い、時には悩みや不安を打ち明け、友情を深め、互いに刺激し合うことで、辛い日々を乗り越えることができました。この勉強会は回を重ねるごとに人数も増えていきました。勉強会で多くの仲間に出会えたことは、私の大切な財産となっ

ています。

また、講師として教壇に立つ私を、温かく指導し支えてくださった先生方からは、多くのことを学びました。その時お世話になった校長先生の「自己燃焼」という言葉が心に残っています。子どもの変容を期して仕事をする人間として、この言葉は、生き方の核となつたそうです。人と人が出会い、つながりながら生きていく中で、一杯生きることの大切さを学び、「子どもたちに全精力を注ぎこめる教師になりたい」と誓ったことを思い出します。今までたくさんの人に出会い、支えられ、励まされたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

期待と希望、不安が始まった新学期、私は四年生の担任になりました。元気いっぱいの子供の二十一人の子どもたちに出会い、忙しいながらも、とても充実した毎日を送っています。クラスみんなで話し合い、学級目標は、『みんな仲間だ！かがやけ四松 けじめ・思いやり・チャレンジ』になりました。この三大柱（けじめ・思いやり・チャレンジ）を心にもち、二十八人一人ひとりの個性が輝く楽しい学級をつくるために、日々頑張っています。時には、心ない言動や自己中心的な態度により、けんかに



なったり、トラブルが起きたりします。しかし、そんな時、クラスみんなの問題として話し合い、解決方法を考えたり、互いに注意し合ったりする子どもたちの姿を見ると、頼もしさを感じます。子どもたちから学ぶことがたくさんあります。

平小小学校での初めての運動会。一番に残った種目は、団体種目の「七人八脚」です。七人で息を合わせて歩くことは難しく、初めは転んでばかりでした。それが好き勝手に歩こうとしたのではうまくできません。グループで意見が合わず泣き出す子もいました。正直、できるのかとても不安になりました。そこで、学級で話し合い、作戦を考えることになりました。「初めて出す足は決め

ておく、肩を組む、かけ声を出す……」など、たくさんの案が出ました。また、「苦手な人をみんなでカバーする、応援し合う、最後まであきらめない、心を一つにする」といった案も出ました。クラスみんなで協力して頑張りたいという気持ちが高まっていきました。

秘密の特訓も行い、子どもたちは徐々にうまくなっていきました。クラスが一丸となって取り組み始めたのです。転んでも立ち上がり、励まし合い、声を掛け合いながら、心を一つに頑張る姿に、子どもたちの成長を感じました。

運動会当日、子どもたちは練習の成果を発揮し、順調な走り出しを見せてくれました。途中、こけても、すぐに立ち上がり、いいペースで進み勝利は目前でした。しかし、最後の最後に白組が追い上げてきて、ついに抜かれてしまいました。悔しさは残りましたが、やり遂げたという達成感を、子どもたちは味わうことができたと思います。感想の中に、「負けたけれど、全力を尽くして、一人ひとりががんばったから、よかったという気持ちになりました。私がこの運動会で成長したと思うことは、仲間と一緒にがんばるといふ気持ちがありました。子どもたちの成長を

身近で感じ、見守り、見届けることができる、教師という職業の素晴らしさを改めて実感した運動会でした。

子どもたちのことで悩んだり、考え込んだりすることがよくあります。しかし、それを解消し元気づけてくれるのも子どもたちであるということ、日々の実践の中で感じていきます。私は、子ども心に寄り添い、多くの学びや感動を共有し、絆を深められる教師でありたいと思います。

今年、初任者研修があり、様々な機会や場所で充実した研修を受けさせていただいています。研修の中で、初任者研修は教師としての土台作りの最高の機会であると言われました。授業実践や日々の指導の中で、初任者指導の先生から、「学び続けることの素晴らしさ」を教えてくださいました。これからも人と人とのつながりを大切に、学ぶ姿勢をいつまでももち続けたいと思います。そして、学んだことを子どもたちのために生かせるよう努めていきたいと思っています。

795-0072

大洲市新谷甲

一九〇〇番地

## 人を動かすのは言葉



北宇和・  
愛治小教諭  
小林 剛  
(平九卒)

教師を志した理由は、単純な性格だったので「家族や親戚のほとんどが教師をしていたので、将来の職業を考えたときに教師以外に浮かばなかった」からだと思えます。ただ、子どもの人格形成に大きく影響を与える時期の小学校の教師にだけは、そんな理由ではなつてはいけないと思っていました。

中学生の時に担任をしていたいた国語の先生がいて、教育相談の際に、相談をしました。

「ぼくは先生になりたいのですが、人に教えられるほど得意な教科はありません。読書は好きだから国語の先生になりたいけれど、古文や漢文は得意ではありません。あきらめた方がいいのでしょうか。」すると、先生は、

「今俺は国語の先生をしているけれど、中学校や高校の時は、別に国語は得意じゃなかった。古文

や漢文なんか、まったくわからなかった。でもなあ、国語の先生になつて、同じ授業を四クラスぐらいで教えて、それを毎年繰り返していたら、嫌でも得意になるぞ。だから、今得意でないからといってあきらめる必要はまったくない。なりたいのなら、なつたらいい。」と言われました。単純な私は、「なんだ、先生も昔は国語が得意ではなかったのか。教えているうちに得意になるのか。だったら、国語の先生を目指そう。」と思つたことを覚えています。今になつて、担任の先生は国語が苦手ではなかったのでは、と思うことがあります。私を励ますために言つた



言葉ではなかったか、と思います。「もつと国語を勉強しろ。頑張れ。」と言われるよりも、当時の自分にとっては最高の言葉だつたと思います。

教育実習で小学校の先生になりたいという自分の本心に気づき、講師として中予の中学校の国語教師を経験し、広見町（現在の鬼北町）の小学校の教諭に正式に採用されました。その学校で体育主任をされていた先生に言われたのが、「お前は、将来体育主任になるためにこの学校に呼ばれたんだ。この町は課外体育が盛んで、得意だろうと苦手だろうと若い男の先生は水泳や陸上の指導をしなればいけない。明日から課外体育の指導を一緒にするぞ。」という言葉でした。単純な私は、「そうか、水泳も陸上も全然得意ではないけれど、将来自分が指導しなければいけないのなら、今のうちにやり方を覚えなければいけない。」と思い、その先生と一緒に水泳や陸上の指導を始めたことを覚えています。その学校で体育主任を経験し、現在の学校に異動する際に、その先生にその時言われた言葉の話をすると、

「そんなこと言つたつけ。課外体

育の指導者の人数が足りなかったから、課外音楽の指導に行かないように声をかけたのは覚えているけど。まあ、でも本当に体育主任になつたんだから、いいだろ。」という言葉が返ってきました。

水泳や陸上の指導を全く知らなかった当時から七年が経過し、小学校体育連盟の北宇和郡の理事長を務め、その先生の息子の担任として課外体育の指導をしている現在の自分がいます。「課外体育と課外音楽の指導だったら、どっちがいい。」という言葉だったら、八年間エレクトーンを習っていた自分としては、課外音楽の指導を選んでいたかもしれません。

今年、全学年の体育の授業をさせてもらっているのですが、最近、低学年の保護者から体育の授業についてお礼を言われました。

その保護者の娘さんは、あまり運動が得意ではなく、マット運動の授業になつて「うしろころがり」ができないことがわかったので、なんとかできるようにしてあげたいと思ひ、授業中よく声をかけていました。ある日、でき始めたので本人に「やったね」と言うと、「家で練習したから。」と言われました。その数日後に保護者からお

礼を言われたので、「できるよになつたらいいなと思つて励ましていたんですよ。本人に聞いたら家でも練習をしていたらいいですね。」と私が言うと、その保護者から、「夜、娘が布団の上で二十分ぐらい泣きながら練習をしているので、『もう、そんなに泣くなら、やめたら』と声をかけたら、『私ができたなら小林先生が喜ぶもん』と言われてしまいました。いつも体育の授業を楽しみにしていますよ。」と言われました。

できるよになれば、子どもが喜ぶと思ひ指導をしていたのですが、子どもは私を喜ばせたかつたようです。まだまだ子どもを伸ばす教師ではなく、子どもに伸ばされる未熟な教師です。今年も何があつてもがんばれる言葉を保護者と子どもからいただきました。

「人を動かすのは言葉」というのが子どもを指導していて感じることです。上手な言葉ではなくても、その時のその子に一番ぴつたりの言葉がけができるような教師を今後も目指していきたいです。

798-1332

北宇和郡鬼北町大字目

一八七三二二



天下無敵



西条・丹原東中教諭  
今泉磨衣子  
(平十九卒)

「天下無敵」これは、私が担任している二年二組の学級目標です。運動でも、勉強でも、団結力でも天下無敵のクラスを目指そうということ、この学級目標に決まりました。

「……シーン。」彼らとの出会いは悲惨なものでした。どんなギャグを言っても笑わないのです。私の笑いのレベルが低いのか、彼らが笑いに対してシビアなのか。先生、何をやっているの?」と言わんばかりの痛い視線を受けながら、一学期がスタートしました。

二組は元気がない、静かだ。と各教科の先生方が口をそろえて言いました。学級日誌の授業評価にも、毎日のように「元気がない」とのコメントが並んでいました。そんな中、クラスマツチが迫っていました。これは団結するチャンスだと思ひ、昼休みになったら全員がグラウンドに出て、男子はサッカー、女子はバレーボールの練習をしました。みんな生き生きとし

ていました。中学生になって、特に女子は昼休みに運動場に出ておもしろい体動かすことがあまりなかったようなので、いい気分転換にもなったのだと思います。練習の甲斐あつてか、クラスマツチでは見事優勝することができました。

そんなこんなで二学期になり、運動会の練習が始まりました。私も、体育教師の血が騒ぎますが、体育教師である以上、全体の指揮をしなければならぬので、なかなか学級の練習につき時間がありませんでした。しかし、体育委員や学級のリーダーを中心にいろいろな作戦を考案し、円陣を組み、毎日一生懸命練習していました。

そして、運動会本番。団体種目全てで一位をとり、完全総合優勝をなしとげました。最後の学級対抗リレーの時、声をからしてクラスメートを応援する生徒の姿を見て、胸が熱くなりました。クラスが一つになった瞬間でした。最後に記念撮影をしたときの生徒たちの充実した笑顔が、全てを物語っていると感じました。本気で取り組んだからこそ感動があるのだというのを覚えていてほしいと心から思いました。

運動会が終わったと思つたらすぐに修学旅行です。教員になつて

初めての修学旅行です。奈良、京都、大阪の旅でしたが、とても充実した旅でした。生徒たちにとつても、古都の文化を見て、聞いて、触れて、感じて、そして味わつて、友達との交流を深められた最高の旅行になったことでしょう。

もうすぐ文化祭で合唱コンクールが行われます。今、昼休みはもっぱら合唱練習です。練習のためにキーボードも購入しました。不思議なもので、あんなにひどかった合唱も練習を重ねるにつれ、それらしくなつてくるものです。昨年は学ランを着て歌つたので、今年はセーラー服を着て歌おうと密かに考えています。まだいけると信じています。

次から次と行事があつて慌しい二学期ですが、行事がある度にクラスが団結していくのが嬉しいのです。そして、私もどんどんクラスの生徒を好きになつていくのです。これからも生徒のいいところをどんどん発見して、三月には、全員がこのクラスを離れたくないと思えるような天下無敵の学級にしていきたいと思ひます。

また、私は昨年度から男子サッカー部の顧問をしています。本校の生徒は、市内の他の中学校と違い、中学校からサッカーを始める生徒が半分以上を占めます。当然

他の中学校との技術差は歴然です。試合のたびに生徒も私も肩ががっくりと落とす日々が続きました。小学校からサッカーを経験している私にとつて、できて当たり前だと思つておられることができなかったり、練習の意図が思うように伝わらなかつたりしたときには、自分がサッカーをする方がなつて楽なのだろうと感じます。指導者としては初心者の私にとつて、正直、一から教えるということの難しさを実感しています。

しかし、嬉しいこともあります。十月に西条市の新人戦がありました。七年ぶりに決勝リーグに進出したのです。決勝リーグでは、一勝もできずに敗退してしまいました。生徒たちには大きな自信になつたようです。保護者の方も、「あんなにへたくそだった子ども

の成長した姿を見て、感動しました。」と言つてくださいました。部活動は、保護者の協力なしではやつていきません。毎日の朝練や、ほぼ毎週末の大会や練習試合の車出しなど、本当に感謝しています。まだまだへたくそで、他のチームと比べると差があると思ひます。しかし、非常に小さな一歩ですが、少しずつ前に進んでいることに喜びを感じています。仕事のことで悩むことは数え切

れないほどたくさんあります。しかし、生徒指導や学級経営の相談に乗つてくださる先生や、部活動指導のアドバイザーをくださる先生、私の食生活を心配して食料を差し入れてくださる先生など、多くの先生方に支えられて、失敗しながらも、楽しく教員生活を送つていきます。そしてなにより、生徒たちの笑顔に元気をもらつています。これからも自分に妥協することなく、全力で生徒と向き合い、生徒と共に成長できる教師でありたいと思ひます。

(☎) 799-1353 西条市三津屋南 四一五



### 勇氣の言葉



今治・大西中教諭

井上 洋  
(平二卒)

今年八月後半に、市内小中学生の海外派遣引率者の一員として、ストラリアに行かせていただく機会を得た。オリンピック開催中ということもあり、日本選手の活躍を気にしていたが、現地ではその活躍がほとんど報道されることがなく、女子ソフトボール、北島選手、吉田選手以外の日本人は、全くと言ってよいほどテレビで見ることができなかつた。残念、四年に一度の祭典だったのに…。

九時間かけて到着した時差一時間のプリズベン、シドニーは冬である。しかし、プリズベンは亜熱帯のため、冬でも温暖で、現地の方は半袖、子どもたちは半ズボンで過ごしていた。我々日本人には半袖では少し肌寒いくらいであったが、湿度が低いため快適であった。派遣中は天候にも恵まれ、良好の状態での研修を進めることができた。



そんなオーストラリア上空から見た朝焼け、雄大な自然や感動的な世界遺産の光景は、今も忘れられない。ゴールドコーストの延々と続く透き通る白浜と青い波、リッチなリゾートホテル群。遙か彼方まで見渡すことができる高原の牧場。ブルーマウンテンという名にふさわしい青くさわやかな霧にかすむ空気が、壮大なパノラマの中に仲良く並んでいる三姉妹の伝説の岩。少し郊外に出かけると林の奥にカンガルーやワラビーなどの野生動物たちを見ることができ

さて、プリズベン市内のホスト校、セント・マシュー・プライマリー・スクールに到着すると、学

校関係者やたくさんの方々が笑顔で、温かく出迎えてくれた。特にホスト校の子どもたちの蒼く透き通る澄んだ瞳、純粋な笑顔は印象的であった。瞳の色は違うけど、今、目の前にいる本校の子どもたちもきれいな瞳、やさしい心をもっている。この宝物(者)を大切にしていきたい。残りの教職生活で大事にしていきたいと考える。

そして、私たち引率者もホームステイするため、ホストファミリーと対面した。握手しながら「Nice to meet you」その後、意味不明・理解不能の英語の嵐。どう反応して、どう答えて、何をしたらよいのかさっぱりわからないまま、ホストファミリーの車に乗車。車中の会話が会話にならない。「言葉が通じなくても大丈夫。Body languageで大丈夫。」などと事前の研修で言っていたが、とんでもない話である。言葉が通じないことが、これほどつらく屈辱的なこととは思っていませんでした。学生時代にも少しまじめに英会話を学んでおけばよかった。今、振り返ってもつらく、苦しい時間である。

伝わらない。伝えられない。そ

んなことから、自然と会話が減っていった。しかし、ホームステイでお世話になったマザーが言った一言は、私に勇気を与えてくれた。「You try」：「間違ってもいいから、やってみよう。」まるで、私が子どもであるように…。そうだとにかくやろう。間違っても、おかしなくてもいいから、やってみよう。そう考えることができた。勇気の言葉である。「I try」忘れかけていた思いがよみがえった。仕事を始めたころの、何でも挑戦していたころの思いが、私にとってはすべてが感動的で、新鮮で、かけがえのない時間であり、貴重な体験であった。そんな国、オーストラリアにも一度行ってみよう。

このような機会を与えて下さった方々、出会った人々、すべての皆さんに感謝します。

794-0114 今治市玉川町八幡甲  
(☎)

二二二二



### 原稿募集

—次号 第一〇八号—

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

◇ 「今、教育に思うこと」を特集しています。ふるってご投稿下さい。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと  
2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など  
3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせて載せますので、ご了承ください。

◇ 原稿メット 四月三十日  
発行 七月一日 予定

★ 字数  
依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。

★ 写真  
筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。



# 今までを振り返って



八幡浜  
大島中教諭  
白石 美保  
(平十二卒)

この原稿を執筆するに当たって、職名の欄に「教諭」と初めて書いた日のことを思い出しました。「講師」と書いていた欄に「教諭」と書ける、その喜びと緊張で手が震えました。そして私は「感謝の心を忘れず、子どもたちから学び、子どもたちに返せる教師になろう。」と気をひきしめました。

## 〔採用！〕

その日、講師をしていた小学校に私宛に電話がかかってきました。大学教授からの「採用おめでとう」と伝える祝福の声でした。私は、その電話で採用合格を知り、天にまでのぼるような気持ちになったことをはつきりと覚えています。

四年間、大学生活を温かく見守ってくださった教授に卒業してもなお、気にとめていただいていることに胸が熱くなりました。そんな優しい教授たちに私は未だに

甘えながら、ことあるごとに愛媛大学に足を運んで、授業に活用できる化石を見に行ったり、いいアイデアをもらいに行ったりしています。

## 〔右往左往の日々〕

そんな私も新規採用になってから、早五年の月日が過ぎようとしています。たくさんの人たちから支えられて今の自分があるのだと思います。そのことに感謝し、日々教師としての資質を高めていこうと実践しているのですが、私は自分自身に自信をもつことができません。本当にこれでもいいのか、はつきりとした指導ができていない自分にさらに腹がたつてしまいます。私は子どもたちと接するとき、問題点をなんとか改善しようと、できる限りの指導をしてきました。例えば、粘り強さを高めるために個人にあった課題を設定し、ワークシートを工夫したり、日ごろから大きな声であいさつができるようにするために、年間を通して、「教室に入る前には、合い言葉。」を掲示したり、手を替え、品を替え実践しながら、奮闘してきたつもりです。しかし、目先のことにとらわれ焦ってしま

い、右往左往し行き当たりばったりになってしまいました。この一年で何もかにもやらなければと、肩に力が入りすぎていったと思います。

## 〔大島にて思うこと〕

十九年度から私は八幡浜市沖合の島、大島中学校に赴任しています。人口約三五〇人のこの島は、漁業やみかん、野菜作りが盛んで、人情味あふれる人たちが生活しています。近年過疎化が進み、小中学生の減少に伴い、小中学校が併設された学校です。今まで、小学校勤務の多かった私は、中学生の計画力、実践力、体力；等々に感心させられる毎日です。そんな中私は、その場その場の指導ではなく、長い一年間という期間で何が私にできるのかということに重点を置いて考えるようになりました。進級時に、こういう子どもになって欲しいという目標をもち、そのために日々何を実践していけばよいのかを毎日工夫しながら取り組んでいます。そして、数年後にはこんな中学生に、こんな大人に成長し、最後には、大島を愛することができると大人になって欲しいと考え、私らしさを生かした指

導を目指しています。

昨年度大島小学校が休校となり、今年度で大島中学校も閉校となります。たくさんのお出がけが詰まったこの学舎がなくなるのは悲しいです。島にとって、子どもたちはまさに宝です。そんな子どもたちの毎日の登校を温かく見守ってくださる地域の方々からの「さびしくなるな。」という言葉をよく耳にします。いつも島民の方々

は二人の生徒に対して優しく接し、あいさつだけでなく、学校の出来事や日々の様子について一声をかけていただいています。このことは、学校や教師に対しても同様で、総合的な学習の時間には、体験談を話していただいたり、地



域素材を生かすよきアドバイザーとして参加して下さったりしています。活動を通して、地域の方々には、本当に大島や大島中学校を愛していらっしやるのが伝わってきます。これらの交流活動を通して、子どもたちも地域の人の気持ち、地域の良さを理解し、自分たちが真剣に考えるようになりました。島民一人一人がお互いを大切にし、地域を愛しているこんな大島が私は、大好きです。

大島にきて、学校、家庭、地域が共に協力し、島の子どもたちが健やかに成長できるよう教育をしていることが直に分かりました。この大島の教師生活を生かし、今後も子どもたちが自分のゴールに向かって前に進むことができよう、子どもたちの成長を見守り続ける教師でありたいと思います。

☎ 796-8060  
八幡浜市大島  
三二二九八一五



教える楽しさ  
・教わる楽しさ



愛媛大  
附属中教諭  
萩野さくら  
(平四卒)

愛媛大学教育学部を卒業し、中学校の家庭科教師になって、はや十何年かたちました。その間に、家庭科の授業時数は大変な勢いで減ってゆき、生徒に家庭科の楽しさを教えることができにくくなっています。しかし、季節の移り変わりを楽しみ、生活に少し手間をかけることで、私たちの生活がど

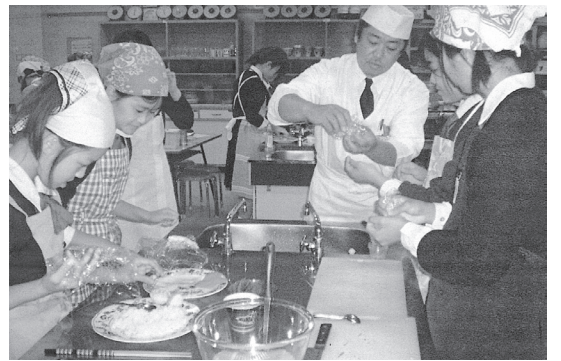


れほど豊かになるかを、ぜひとも生徒に伝えたいと思つて授業をしてきました。彼らと授業をしていると、自分の好きな分野を生かした仕事につけたことに幸せを感じることがよくあります。

先日、そういった「教える」楽しさだけでなく、「教わる」楽しさや幸せも存分に味わえた時間がありました。

本校で、丸一日選択授業を行うという、斬新な計画が立てられました。日頃、時間の制約があつてできにくい授業内容にも取り組めるメリットがあります。そこで、かねてより教えたかつた、「ゆかたの着付け」と「日本の料理」にチャレンジしました。しかし、どちらも専門性が高いため、ゲストティーチャーをお願いしました。

ゆかたの着付けにおいて、「一緒に授業をして下さい。」の呼びかけに答えて下さったのは、生徒のお母さん、おばあちゃん、そして卒業生のお母さんの三人でした。初めてお会いしたときから、皆さんが日本の文化に造詣が深く、愛しておられることが言葉の端々から伝わってきて、「私もこうでありたいなあ。」としきり



に思いました。授業においても、「ひじが見えるほど腕を出さないの。はしたなくならないように、ちよつと手を袖にそえてね。」「足をそろえて、小股で歩くときれいなよ。」と、実際にそういう装いの先生方にいわれると生徒も自然にそうなつてきます。普段は、「はしたない」ことが恥ずかしいことであると、生徒たちに実感させることは難しいけれど、このときは確かに伝わったようです。おしとやかなゆかたの女の子の出来上がり、となりました。さらさらした表情が、授業した者への何よりのご褒美です。いつの間にか私も生徒の一人になつたようで、日

頃の着付けの間違いを正して頂いたり、新しい帯の結び方を教わつたりと、四時間があつという間でした。

午後からは「日本の料理」の実習です。ここでは、松山の老舗日本料理「すし丸」の、社長さん、料理長さん、道後店長さんというそうそうたるメンバーに先生になつていただきました。お品書きは、「茶碗蒸し、ぶりの照り焼き、青菜のごまマヨネーズ和え、手鞠寿司」と豪華なものです。生徒にとつてはもちろん初体験のものばかりでしたが、日頃料理をし慣れている私にとつても、新発見が多くありました。例えば、茶碗蒸しに入れる鶏肉は、あらかじめ醤油洗いをし臭みを抜き、魚介類は熱湯に通して冷水で締めておく。お鍋で湯を張つて加熱すると、すが立ちにくい。ぶりの照り焼きは最後に秘伝のたれをつややかに塗つて。あしらの菊花かぶ(持参していただきました)の、一本一本の細さが髪の毛ほど!なんと素晴らしい包丁の技かと感動しました。和え物は、美しい落ち葉の上小さく高く盛つて。つんと高く盛るのは、まだ誰も手を付けて

いない、あなたのためのお料理ですよという、もてなしの気持ちのあらわれなんだそうです。

丸一日実習で、生徒たちはさすがにぐったりとした様子でしたが、それでも「楽しかった!」と声を上げて帰って行きました。教師は日頃一人で教壇に立ちますが、この日のように他の分野で活躍されている方々に後押しされながら、自分自身も成長できる機会があつたことをしみじみとありがたく感じました。これもまた、教師の醍醐味にちがいません。





日々の生活の中で



県立今治東  
中等教育学校教諭  
増田 稚子  
(平十五院卒)

私はこの四月に本校に赴任いたしました。中等教育学校となつて六年目となり、中等一年生から六年生までが同じ校舎で学び、学校生活をともにしています。

私は中等二年生の担任をさせていただいています。中等二年生は中学校でいいますと、中学二年生です。体中から溢れ出すエネルギーは大変大きく、教室は毎日元気な笑い声で溢れています。また、思春期を迎え、心の成長とともにもどかしく思う気持ちや揺れ動く気持ち、友達とのコミュニケーションの取り方に悩みを抱えている生徒もいます。

中学校での指導は本校に赴任をして初めてで、戸惑い悩むことが多く、日々模索しながら教育活動を行っています。特に学級経営に關してはまさに手探り状態で、どうしたいかをしっかりと考えてか

ら行動することを心がけていますが、私自身の考えや行動に自信が持てないときもあります。そのようなどき、多くの先生方が様々な面でご指導やアドバイスをくださり、それが私にとって大きな指針となっています。

本校の学校行事には、学級が一丸となって取り組むものがいくつもあります。準備や練習などを通して、クラスがまとまり、団結力が高まっていきます。しかし、二学期が始まってすぐの頃、私は学級がまとまらず、悩んでいました。そのとき、学年主任の先生が話してくださった言葉が、心に深く残っています。

「クラス全員を動かそうとすると難しいですよ。クラスの中に、自分の言葉で動いてくれる味方をまずは一〜二割作るの。そうしたらその子達が周りを巻き込んでいくてくれて、クラス全体が動くようになりますよ。」

その言葉を聞いて、私は全員を動かそうと必死になっていたことに気がつきました。クラスで一〜二割というところまで小さくが、手の届くところまで小さくなった気持ちでした。このときか

ら、これは私の一つの目標になり、そして大きな力になりました。

それは、九月に行われた運動会に向けてのことでした。二年生はクラス全員で行う「しまなみりレー」という学年競技がありました。「しまなみりレー」とは、百メートル走から始まり、二人三脚、三人四脚、四人五脚、騎馬走、タイヤ引きなどでバトンを繋いでいく競技です。特に、二人三脚などの足を結んで走る競技と騎馬走は練習するか、しないかで大きな差があると聞いていました。体育の授業では学年演技の練習があり、しまなみりレーの練習をする時間は難しい状況でした。そこで私は「放

課後の時間を使って、一人一度はしまなみりレーの練習をしよう。」とクラスに提案しました。練習をせずに本番を迎えることは避けたかったのです。

果たしてこの言葉は届くのだろうか。不安はありますが。中でも四人五脚のメンバーは、運動があまり得意ではない子が何人かいて、練習の初日は歩くことすらできませんでした。私は「これは走りきれぬのだろうか、アンカーなのに大丈夫だろうか。」という気持ちでいっぱいでした。すると、四人五脚のメンバーが、「先生、今日の放課後練習するので来てください。」と、毎日集まったのです。生徒と一緒にどうすれば早く走れるようになるかを考え、いろいろと試しました。四人五脚のメンバーが「このままではいけない。三十分でも集まって練習をしよう。」と必死に練習をする姿を見た他の生徒は、四人五脚のメンバーの思いが伝わったかのように、それぞれのメンバーで集まり、互いに励まし合い練習をするようになりました。

そして迎えた運動会当日。スタート直後はやや出遅れたもの



の、皆の一心の応援を受け、第二走者がトップに躍り出ました。トップで渡されたバトンを皆が必死に守り、アンカーまで繋いだバトン。テープを切った四人五脚のメンバーの溢れる笑顔。しまなみりレーで、我が二〇二HRは大きな差をつけて一番でゴールしました。「やったー！」と大きな叫びがこだましていました。

生徒の感想では「頑張つて練習してよかったです。今回のしまなみりレーで一位をとれたことは絶対に忘れません。」との言葉をたくさん見ることができました。その後の合唱コンクールや文化祭での学級新聞作りでも、リーダーが周りの生徒たちに「やろうよ。頑張ろうよ！」と声を掛け合う姿を見ることが多くなりました。

生徒とともに過ごす時間の中で、時々、ハツと思うことがあります。生徒から教えてもらうことや気づかせてもらうことがあります。日々成長していく生徒とともに、私も成長していきたいと考えています。

〒794-0062 今治市馬越町  
一六一二二二

# 文 芸



川 柳



森貞 和雄  
(昭二五青師卒)

こんなはずないと鏡を拭いてみる  
記憶力都合のよいこと忘れない  
儼約もケチも同じに見る世間  
口下手で得することもときにある  
ない知恵を無理に絞ると嘘が出る  
そこまでは本音で言えぬ事もある  
遠回しに言うから本音わからない  
酔うまでは酒飲むマナー知っていた  
揉み手する其処が怪しい此の男  
教えない子供に出来る訳がない  
試食品これは旨いと褒めるだけ  
聴くたびに女の齢は目減りする  
子育ての責任持たぬ親が増え  
それはそれはこれじゃと譲らない  
ちくちくと刺してもバラは愛される

(☎) 791-0245 松山市南梅本町  
八八七二二

俳 句

句集「青柿千句集」より

平野 青流  
(昭二九卒)

春

重き闇余寒に軋む巡視音  
童追ふ箒の先に先に喋  
目に触る、もの皆芽吹く山路かな  
春寒や一滴一音の水琴窟  
寛政の一探の拠点春時雨

夏

奔放の蝌蚪の世界や隠れ沼  
快晴の天を指しけり松の芯  
番傘に下駄備へあり梅雨の宿  
素謡の声の太さよ夏座敷  
蜻蛉撮るカメラに蜻蛉止まりけり

秋

風鈴に風立ち寄りぬひとり酒  
風穴の瑠璃姫塚や紅葉溪  
奥飛驒のスーパー林道薄紅葉  
裏表見せて落ちけり桐一葉  
秋空や槍投げの槍一文字

冬

焼詣の温み抱えてバスを待つ  
子の呉れし温みの残る寒卵

高砂の尉となりきり初詣  
早暁や囲炉裏埋もれ火堀りほぐす  
地吹雪の空叫び山吹ゆるかな

日本の自然の美しさは世界一と  
いう。日本語の美しさもかりで  
ある。その中から自然発生的に生  
まれてたのが、俳諧であろう。こ  
とばの使い方ひとつで内容もがら  
り変化していくことのおもしろ  
さ。四季それぞれの中で感じたこ  
と、思ったことを五・七・五のリズ  
ムに乗せて表現するすばらしさ。  
私が俳句に興味をもったのは、  
小学校六年国語教科書の中に俳句  
の鑑賞があった。どのように指導  
したら理解してくれるのかの教材  
研究をした時からである。研究す  
ればする程深み、味わいをもち  
十七音で表現することのすばらし  
さに感動したからである。

それから五十年、五七五の表現  
を自分なりに記録してきたのであ  
る。拙い句ではあるが、私にとつ  
ては人生の記録である。自然を観  
察し、ひとを観、己を見つめ、そ  
れを俳句に表現することは、自己  
を磨くことであると信じて続けて  
いる。今後も遅々と歩み続けてい  
きたい。ご指導をお願いしたい。

(☎) 798-0054 宇和島市笹町  
一一三二二九

## 絵手紙

はじめての絵てがみ

宮内 久司  
(昭三二年課程修了)

友人に勧められて絵手紙なるも  
のを始めた。よく見かける絵手紙  
は、画面いっぱい力強くそれに  
一言添えてあるだけ。これくらい  
ならすぐにでもと思ったのだが、  
なかなか難しい。私は下手の横好  
きで水墨画を少しばかりやってき  
たが、これが邪魔をするのか写真  
的になっておもしろくない。何事  
も簡単そうに見えるものほど奥が  
深いのかも知れない。五枚や十枚  
一か月や二か月で音を上げてはな  
るまい。時間はいくらでもある。  
失敗に失敗を重ねながら頑張っ



みよう。身近かあるサインペン  
でも割り箸でも、用紙も色も何で  
もかまわないようだ。描きたいも  
のを描きたい時に自分の好きな色  
形で自分らしく描き続けてみよう  
自分が納得すればそれでいいのだ  
が……。友人に笑われる種がまた  
一つ増えた。

(☎) 791-0242 松山市北梅本町七四二



短 歌

八十路を越えての歌



池上 馨  
(昭一八卒)

病院をいづくにせんと迷ひをり春の嵐の山に籠る日

われに添ふ妻のことばのうつくしといふ人のありて通院たのしも

担がる実盛様をくぐりゆくならはしなればわれもくぐれり

選挙戦終りし村のしづけさにゴミ収集車の音立ちはじめ

文学のみでは駄目とふ妻のはげしさになづくことも知恵と思ひつ

「姫捨扇水仙」とふ名を知りてより見落としたるその花に立つ

庭の手入れをして娘を待つに娘の植ゑしいちはつ茂る花も盛りに

朝から国旗と町旗ゆれあひて運動会も昼となりたり

満月の歪みて見ゆるわれの目を悲しむ妻も目を病めるなり

わが椿テレビ画面に映りをり時に蜜吸ふ鳥の現はる

\*\*\*\*\*

八十二歳の春から、「生涯学習のユーキヤン」の講座で通信教育を受け、その後、「NHK学園短歌友の会」に入会し、二年目になる。

愛師時代、一回かぎりの短歌教室（講師 番町小学校長先生）に参加し、二部生、長野君の自作

今日もかも御軍人は常夏の南の島にいやたけぶらんの短歌に心打たれた。

また、吟詠趣味の会（会長は先輩佐々木正作先生）に入会して、神藏為治先生の国語の時間、和歌の朗詠を披露し、先生のお褒めのことばをいただいた。

こんなことが種となつて、それが八十路を越えて芽ざしたようなことなのであろうか。

796-0805

西宇和郡伊方町井野浦

八五

俳 絵

老後の楽しみに

上窪田美鶴

旧姓・長岡 功  
(昭二九卒)

水墨画でまず教えて頂いたのは「気韻生动」<sup>キインブドウ</sup> 絵や書などで、気品がいきいきと感じられること。「粗密濃淡」。筆に水と墨の含ませ方ひとつで「墨に五彩あり。」

老後の楽しみに、絵を習っています。おかげで毎日、退屈をしません。毎日絵を描いているわけではありませんが、日頃注意深く、

物を観るようになりました。花の手入れをする時、この花びらは何枚とか、葉の形、付き方はどうなっているか等、自然と観察をしています。私は俳画仕上げなので、俳句の勉強も、常に努力をしています。（月二回の句会がすくきます）家で復習をする時の墨の匂ひ、下手でも絵と俳句が巧く画面に収まった時の充実感。誰にもはばからぬ至福の時。俳画教室での先生はじめ皆様との交流も楽しみです。

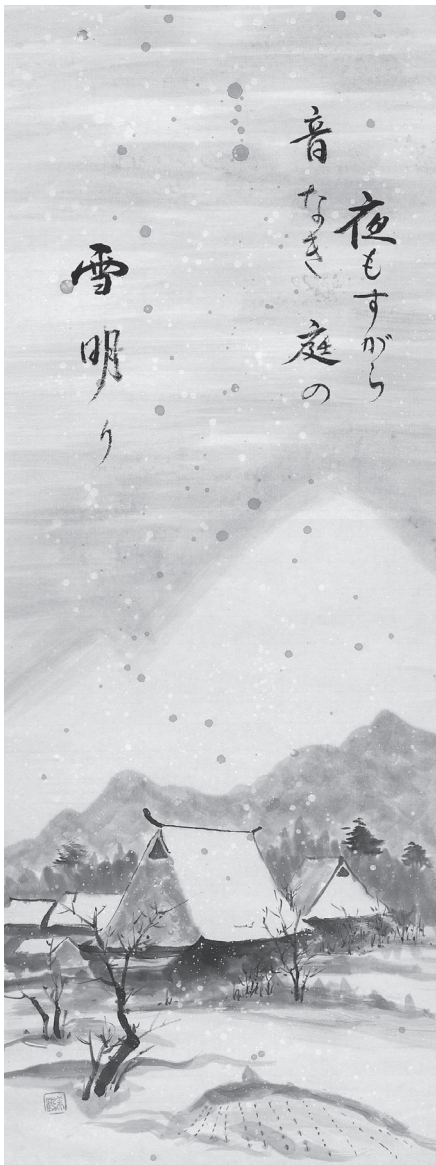
先般「墨と硯の座談会」で、硯海のない古代硯で唐墨（最高級品）を磨る体験をさせて戴きました。良い硯、良い墨ですった液は粒子

が細かく、のびが違う事。良い墨液は腐るので、その日使用する分だけ作る。硯、筆の後始末をきちつとすること。等々。思いきつて出かけて行ってよかったです。

相田みつをさんの日めくりにある「一生勉強 一生青春」を目指していますが、残念、耳が遠くなりました。

791-8013 松山市山越二丁目 六一三五

P.S 作品の題は「静寂」





漢詩

伊予長浜八景(三)



豊嶋 睦 (昭二卒)

5 肱川嵐

近世の長浜における産業の発展は、肱川との関わりなしには考えられない。その肱川の河口や船溜りの江湖には、常に川舟が五、六十艘、帆船が十余艘出入りしていた。川舟で、川の上流から運ばれてきた産物(木材・竹材・木炭・穀物・晒蠟・和紙等)は、帆船に積みかえられて阪神方面へと送り出されるのだが、中でも、

木材は、秋田・和歌山と共に、長浜は日本三大木材集散地の一つであり、市が立てば多くの仲買人が集まり、街中の賑わいには一入のものがあったという。

こうして、街の発展に大きく関わった肱川は、一方、人々の日々の生活に厳しさを齎してもいた。

というのは、毎年、秋の深まる十一月頃から翌春の三月頃まで、川面に浮かぶ筏や船、そして橋の上や街中をも巻き込んで、遠慮会釈もなく吹きつけてくる寒冷多湿の肱川嵐がそれである。もともと、その昔の川舟は、帆を上げるなどして交通手段に、まこと見事に利用して、この狂風を役立て、はいのだが……。

さて、世界的にも稀な肱川嵐なる現象の、そのメカニズムはなお明らかではないが、霧をとまなつた真綿状の白風が、哮えるがごとく唸るがように、ヒュー／＼とゴォ／＼と河口に吹きつけるさまは、宛ら、飛龍が、千里の後方まで翻けるがように荒ぶのである。

肱川嵐

寒冷早朝人影絶  
街中橋上白風号  
哮哮唸唸吹河口  
宛似飛龍千里翻

【仄起・豪韻】

寒冷の早朝 人影絶え  
街中 橋上 白風号ぶ  
哮哮 唸唸 河口に吹かば  
宛ら似たり 飛龍千里を翻けるに

○白風―夜明け前の河口に、霧

をとまなつて吹き出す白い強風。

○哮哮―猛獣の怒りほえる声のさま。

○唸唸―唸り叫ぶ声のさま。

○飛龍―龍が雲に乗って空をとぶさま。『莊子』逍遙遊に、「飛龍に御して四海の外に遊ぶ」とあるのがそれである。



猛々しく白風荒ぶ肱川嵐

6 万松山瑞龍寺に

賽す

開閉橋の架かる以前、長浜対岸の沖浦へは、渡し舟に乗らなければ渡れなかった。しかし、四月十七日のお観音さんの縁日の時だけは、小舟を横に並べてその上に板を渡した舟橋が架かり、その上を歩いてお参りできた。その舟橋を渡ったそこからお観音さんまで

の沿道には、門前町よろしく玩具具屋さんや駄菓子屋さんなど露店がずらり。親から頂いた三十銭ばかりのお小遣いは瞬く間に遣い果したが、それでも、一年中で最も楽しい一日であった。

こゝにいうお観音さんとは、沖浦の小高い丘の上にある万松山瑞龍寺のこと。このお寺には、国宝の十一面観音立像(大正六年指定)がある。長浜町観光協会発行の「長浜の観光」によれば、平清盛の娘登喜姫が、父の罪障消滅を願って小田町の清盛寺へ寄進したものとある。後、盤珪国師を経て大洲城三代目藩主泰恒公の手に渡り、参勤交代の折の海上交通安全を祈るため、この沖浦の地に移されたという。

さて、万松山瑞龍寺は桜の名所。小鳥たちの囀る桜並木の坂道を登りつめると、そこが瀬戸の海を展望できる瑞龍寺である。かつて、作家井上靖氏も、内海の波の音を聞きながら拝観した(昭・46『文芸春秋』)というその十一面観音様に、静かに手を合わすと、隠々として響いてくる梵鐘に、一切の雑念も愁いも忘れて、心の安らぎを覚えてくるのである。

賽 万松山瑞龍寺  
画眉 睨睨踏青遊

山寺芳菲春景幽  
閑 拜金仙塵外境  
鐘声隱隱散人愁

【平起・尤韻】

画眉 睨睨 青を踏んで遊べば  
山寺の芳菲 春景幽なり  
閑かに金仙を拜せば 塵外の境  
鐘声隱隱 人の愁いを散す  
○画眉―ほおじること。

○睨睨―鳴き声のよいさま。  
○踏青―青草をふむ意で、春に郊外に出歩くこと。  
○芳菲―花がかぐわしく匂う。  
○金仙―仏様の別称。



桜の名所 沖浦観音様

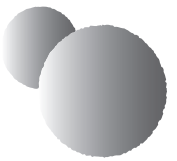
738-0025

広島県廿日市市平良  
一 一 二 一 九

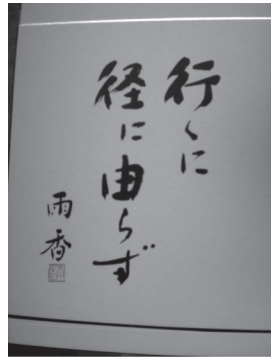


林傳次先生「遺稿集」より

行くに徑に由らず



愛媛県総合教育センターに勤務していたときだった。三月末、Y 中学校教頭として異動辞令を拝命した。センターを辞するに際して、それぞれの部屋に挨拶回りをしている、第三研究部長室へお伺いした時だった。当時の白石信一第三研究部長さんが、「君にはこの言葉を贈ろう。」と言われて、色紙にさらさらと書いてくださった。



「部長さんこの言葉は。」と問い尋ねた。

「では、裏に読み方と出典を書いておきましょう。」と色紙の裏にそのことを書いてくださった。「後は、君次第だよ。」と温かく微笑みながら私に下さった。今もその色紙は、我が家我が部屋で私に語りかけてくださっている。

持ち帰りこの色紙の言葉を調べた。意味、内容は理解した。しかし、浅学非才、感性の鈍い私であったが為、白石先生のご意図を十分に体得しないままで二十年近い歳月が流れた。今年に入って直ぐのことだった、内田守弥大先輩からのお電話があった。「同窓会報百五号に掲載されていた『師道鑽仰碑』を興味深く読ませていたのだが、あなたは、林傳次先生の遺稿集『把翠』があることを知っていますか。」と。「私は全く知りませんでした。」とお返事すると、「それなら僕をお貸しするから是非読んでほしい。」とおっしゃってくださいました。

この本を私も手に入れたいと、インターネットで検索した。東京



の古本店に一冊有ることに辿り着いた。早速購入した。カバー付きの「把翠」が送られてきた。早速魅入られるように読み入った。読みながら心の高ぶりを覚えた。

「このご本にもっと早く出会いたかった」との思いがしきりにした。読んでいてハツとする文に出会った。まさしく「行くに徑に由らず」を語っている林傳次先生の遺文である。

それを以下に掲載する。

前 略

「汚職」という文字を新聞で始めて見たときは一寸変な気持ちがあった。以前ならとく職というところだが、とくの字が当用漢字から省かれたために、これに代わって「汚職」ということばが考えだされたのだとはわかっていても、とく職ということばから受けるものは、何かしら変わった感じがしてならなかった。しかし見なれていくうちに、汚の字はけがすの意味よりも、汚いの意味に使われることが多いために、その行為のけがらわしさ、きたなさを直感的に感じさせて、かえってとく職よりも効果的かも知れない、などと思ったりもした。

○ 取賄とか贈賄とか汚職とか、そういう種類のことばに接する度ごとに、すぐ結びついて浮かんでくる一句が、標題の「行くに徑に由らず」である。

○ いうまでもなく論語雍也編に見えることばで、全文の意味は「門人の子游が魯の武城の宰(代官)になった。孔子がなんじは部下に立派な人物を得たかと尋ねると、子游は、実は澹台滅明というものがあります。この人物は、道を歩く場合に小路を通ることをせず、常に公道を闊歩いたしております。(行くに徑に由らず。)又公務以外には、まだ一度も私の自宅を訪ねて来たこととはございません。この者がま

○ ず人材であるうかと存じますが、と答えた。」(諸橋博士の近業「掌中論語の講義」による)というのである。

○ 四十年前、林泰輔博士の論語の講筵に侍した時には、お恥ずかしいことながらまだこの章に感銘を受けるほどには成熟していなかった。わたしがこれに深く心を打たれたのはそれから十年あまりも後で、ある県の学務課につとめて、教員の人事を取り扱わねばならなくなつた時である。「無能という評なら甘んじて受けよう。不正だとか不公平だとかいう評をうけるような事は断じてあつてはならぬ。」、学務課へ入らなければならぬ

後 略

○ くなつた時、三四ヶ条の心構えを自らきめた一つがこの事であつたが、それから三十四ヶ月後拾い読みした論語の中に、この章に行きあたつて異常な感動を覚えたのであつた。

○ それから三十年、この「行くに徑に由らず」の一句を心の一つの支柱として生きようと努めてきたが、この一句を知つたおかげで過誤から免れ得たことが少くないことだろうとありがたく思っている。

林傳次先生の教えを受けた、愛媛師範学校卒業生は、その後教職にあつて、林先生のお教えを頑なに守る証として、卒業していく教員達に饒の言葉として、この「行くに徑に由らず」を贈つたという。ところで、平成二十年六月、教員採用試験、管理職登用をめぐる金銭の授受があつたとして、大分県教育庁義務教育課参事、湯布市教育長の二人が収賄容疑で逮捕され、同県佐伯市の小学校長、女性教頭、同県義務教育課参事、等三人が贈賄容疑で逮捕され、全国の教育界に激震が走つた。

教育に携わる者は、林傳次先生の魂の入つた教えでもあるこの言葉を常に肝に銘じて歩み行くべきとの思いが強くする。

(編集子 菅田)

# 第十一回愛媛大学教育学部同窓会懇親会

## 報告

同窓会理事

附小・教諭

大森 尚慶

期日 平成二十年八月十七日

場所 ひめぎんホール真珠の間  
(旧県民文化会館)

出席 百八十三名

### 一 はじめに

猛暑のピークも過ぎ去り、日差しも多少の和らぎを見せ始めた八月十七日、伊予鉄会館から、ひめぎんホール真珠の間(旧県民文化会館)に会場を移し、第十一回愛媛大学教育学部同窓会懇親会が盛大に開催されました



会場の風景



祝辞風景

をご卒業の亀井英男先生をはじめ、平成十二年度に愛媛大学をご卒業の先生まで、総計百八十三名にもものぼるご参加をいただきました。

### 二 懇親会報告

正午になり、垂水葉子副会長の進行のもと、升田守副会長により高らかに懇親会の開会が宣言されました。さらに、池内謙三理事の音頭で恩師、会員物故者に対する黙祷を捧げた後、奥定一孝会長よりご挨拶をいただきました。

その後、小松正幸学長と壽卓三教育学部長よりご祝辞を賜りました。お話を伺いして、会員一同「教育学部同窓会」への期待の大きさと重要性を再確認できました。続いて、村上朋子副会長より来賓・恩師の先生方の紹介がありました。

今回の懇親会では、記念口演と



懇親会風景



菊志んさん口演

して、平成十九年三月に真打ちに昇進された、古今亭菊志んさんに落語の口演をしていただきました。実は、古今亭菊志んさんこと山口直樹さんは、平成六年に愛媛大学教育学部をご卒業された同窓会員です。口演では、女性を演じる際の艶やかな仕草などのプロの技術も紹介していただき、笑いの中にも伝統芸能の素晴らしさを感じられる、貴重な時間を過ごすことができました。

そして、菊池巧氏のご発声でいよいよ開演です。宴が始まると、各テーブルでの歓談が盛り上がりました。テーブルは、ほぼ同世代の会員が集まっているため、学生時代の懐かしい思い出話に花を咲かせたり、久しぶりに顔を合わせた友人と現状を報告しあったりする姿が見られました。宴が深まるにつれ、お酒を片手にテーブル

間での移動も始まり、先輩の先生を囲んで教育について語り合ったり、古今亭菊志んさんに落語界のお話を伺ったりと、各々有意義な時間を過ごしました。また、即興で詩吟を披露して下さった方もいらっしゃって、和やかな雰囲気であつという間に三時間が過ぎ去りました。最後に、村上朋子副会長の閉式のご挨拶(万歳三唱)で幕を閉じました。会員の皆様は名残を惜しみながらも、次回の同窓会での再会を約束して会場を後にされていきました。

次回は二年後の平成二十二年度を予定しております。多数の会員の皆様参加を期待しております。



万歳三唱

この懇親会は、愛媛師範学校・愛媛女子師範学校・愛媛青年師範学校・愛媛大学教育学部を卒業した同窓生が、来賓や恩師の先生方をお招きして、旧知を温めたり交流を深めたりすることを通して団結し、愛媛大学教育学部同窓会の益々の発展を目指すことを目的として、二年に一度開かれています。今回は、小松正幸学長・壽卓三教育学部長が来賓として、富田恒夫先生・兵頭寛先生・宮内正義先生・村上嘉一先生・石川廣美先生・渡部晴行先生・金藤泰伸先生・久保木道子先生・菊川國夫先生・鮎田崎子先生が恩師としてご出席いただきました。また、最高齢者である昭和十五年度に愛媛師範学校





小松学長より祝辞を戴く



学長・学部長の交歓風景



奥定会長の挨拶  
明日の同窓会の夢を語る



和気藹々の楽しい談笑と酒宴の懇親会



飛び入り余興歓迎  
詩吟あり校歌あり



菊池功氏の乾杯の  
音頭で懇親の会始まる



壽教育学部長より祝辞を戴く



物故同窓生への黙祷を  
呼びかける池内先生



名司会の垂水副会長



先輩との久しぶりの笑顔の再会に  
話が弾む



旧交を温めてパチリ



新進気鋭  
菊志ん師匠の高座



升田副会長の開会のことばで  
会は始まった



万歳三唱で会は盛会履に修了



同窓会役員による  
真珠の間入口前の受付風景

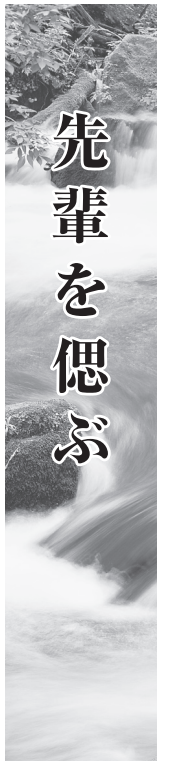


見事にまとめられた  
村上副会長の閉会の挨拶



会場を笑いの渦に巻き込んだ





# 先輩を偲ぶ

## 独学で教師を目指した 森岡数栄先生百九年の足跡(九)



上甲 修  
(昭二九卒)

### 師範学校の入試

師範学校から届いた入試要項を見ると次のようでした。

大正十一年二月六日午前九時より

第一日 国語(古文、現代文)漢文  
数学(代数、幾何、三角)

第二日 地理(日本地理、外国地理)  
歴史(日本史、西洋史)

第三日 物理学、化学

第四日 口頭試問

試験当日、森岡青年は定刻より三十分程早く愛媛師範学校の門をくぐった。愛媛師範へは検定試験で何度か来ていたが、今日は入學試験だから、それまでとは違った緊張感が湧いてきたのです。

受験生は全部で百人余り、服装は殆ど中学校の制服を着ていた。募集人員は四十人、半分以上は不合格になると思うと森岡青年は複雑な気持ちになった。

入試の全日程が無事終り、森岡青年は出来たようであり、出来なかつたようでもあり、自信は全く

ありませんでした。

数日後、合格発表の記事が出ている新聞が来て、直ぐ開いて見ると自分の名前が出ていた。この時の嬉しさは教員を志して約十年、命がけて様々な苦難と向かい合いながら独学を続けてきただけに例えようがなく、「欣喜雀躍」とはこんな時に使う言葉であろうかと思つたのです。

合格したことを畑で仕事していた両親に知らせると両親は、それまで見たこともないような笑顔で「よかつたの。」と言つて喜んでくれた。

### 師範学校の入学式

森岡青年はそれまで人生についていろいろ悩んでいたのが、師範に入學することで、将来の方向付けがはつきりした。今まで着ていた泥まみれの帽子や作業着を脱ぎ、桜の花の中に「師」の入った帽章をつけた帽子、同じく徽章のボタンをつけた学生服に着替えるのですから天にも昇る気持ちでした。

大正十一年四月、入学式で森岡青年は入學生を代表して次のようなお礼の言葉を述べたのです。

「この度私たち四十人が本校の第二部生として入學を許可されました。良き教師になるよう共に勉學に励みたいと思います。先生方

の御指導よろしくお願いします。」  
森岡青年はこの時、満二十六歳、他の新入生より九年も遅れての入學でした。

### 寄宿舎生活はすべて軍隊式

入學者は全員寄宿舎生活で一室に四人。起床も授業も、昼食、就寝に至るまで、すべてラッパの合図で行動した。教科の中に軍事教練があり、指導は軍隊から配属された将校で時には、城北の練兵場で銃で射撃の訓練もあった。

一学期の終りの一週間は、梅津寺で水泳の練習でした。当時はどの学校にもプールは無く、正しい泳ぎ方を知らないのが普通だった。最後の日は遠泳で、四キロ以上泳げる者、二キロ以上の者、一キロ以上と三段階に分けて泳いだのですが、森岡青年は初心者でありながら梅津寺から高浜までの約七キロ泳いだ。

### 私、親子が育てていった

#### 平和観を支えてくれた… 小学校担任のT女先生



重見 法樹  
(昭二五)

私の著書の中に「登校拒否児が語る学校への「歴史的悲願像」という論文があります。この著書は何とかして、私の小学生時代(一年〜二年)のT先生が生きて

いらつしやる間にその一部でも読んで戴こうと努力した著書ですが、間に合いませんでした。それだけに、T先生が亡くなられた時には申し訳ないの心でいっぱいでした。そんなこともあつて、葬儀の時のお別れの言葉には、いつも私に一語一語に心をこめてくださった折りと、言葉が参加者にも伝わっていくように心掛け、次のように「甲文」を読み上げることができたのです。「先生!の年になるまで小生を見離さず待っていてくださいましてありがとうございます。先生の支えがなかったら、読売新聞教育賞を受けた「登校拒否に関する論文」を発表することは不可能だったでしょう。ここまでこれたのは、いつも、先生が論してくださいました。次のような言葉があつたからです。それはいつも「法樹さん、あなたのお父さんはなあ、おえらい方じゃつた、小学校の校長(森盲天外のプランナー)にしておくのはもつたない人じゃつたよ、それはなあ、私が結婚してやつと、子どもが生まれた時に、『Tさん、女の子でよかつたのう』と、おっしゃるけん、きよとんとしていたら、『女の子は、戦争にとられないじゃろが……』と、おっしゃつたのよ。その時、この校長さんはすこいお方じゃと思つたぞな、……もう「涙」「涙」じゃつたがな。この声があつたけん、あの娘を歯を喰いしばつて大學を出すことができたのじゃけん。う。主人が戦死してしまつた時なんか、どうすることもでき

ず、何回、娘と共に、あの世にと思つた時もあつたけん、やつぱり、そのつど、あなたのお父さんが言つてくださった『女の子でよかつたのう』……あの、声じゃつたんよ。』と、T先生は九十歳を越える顔に涙を見せながら語ってくれた姿を忘れることが出来ません。しかし、もう、その頃は、渡辺白泉が語るが如く、『戦争が廊下の奥に立つていた』のです。

父 重見 貞一  
愛媛師範

卒T8

元 潮見・垣生・番町の校長、  
その他附属副校長

執筆者 重見 法樹

・愛媛師範卒S25

・東洋大(社会学) 卒S33

・愛大研究生(哲学)

修S25〜27

研究者書(子ども学の研究者)

○登校拒否児たちが語る学校への

『歴史的悲願像』

(近代文芸社一九九七年)

○「戦後教育の原点を守るのは誰か」

(東京図書出版二〇〇四年)

◎本年三月出版「予定」都朋社

○文化哲学から見た

浮世絵と俳句のアンサンブルを

通して見えてくる日本人の「顔」

(論文二〇〇九年)

受賞

第四十二回 読売教育賞

第十六回 日本標準教育賞

第二回 東京都教職員互助会賞



上岡治郎君を偲んで



伊藤 始  
(昭二〇・師本)

『同窓会報』が届いたとき、まっ先に見るのが、上岡治郎君執筆の「愛媛教育史」だった。愛媛の教育に特に功労のあった先輩を取りあげ、その経歴、功績、エピソードが数葉の写真とともに掲載されていた。今回は誰だろう、ということも楽しみだった。

彼は、書こうとする人物や家族、知人など関係者に直接会って話を聞いたり、資料を入手していた。だから、内容が豊かで記述もリアルだった。

伝記を書く基本を着実に実践していたのである。その足を使った労作に、私はいつも敬服していた。いつだったか電話で、私たちのすばらしい恩師、小川太郎先生と大喜多秀先生を取りあげてほしいと言った。「今、リストアップしている人が数名いるんだ。その後で必ず書くよ」と話していた。が、残念な結果になってしまった。ご子息、幹夫さんの話によると

彼の収集した資料が二部屋いっぱいにあったという。それを聞いたとき、彼の執筆方法を思いだした。資料を全部壁面に展示し、それを見ながら構想を練るのだという。そして決まったら一気に書く。彼らしいアイデアを生かしたユニークな方法である。

ある時、「ひとりの人間には、表面の言動やうわさでは理解できない、真剣で誠実な生の営みがあることを知った。だから、軽々しく人の批評をすべきではないと思つた」と、話していた。

これは「愛媛教育史」を書くなかで感得したものだろう。吾人の銘記すべき重いことばである。

話は変わるが、私は現在折にふれて短歌を作つて楽しんでる。その入門指導をしてくれたのが、上岡君である。

予科一年生のある日、道後温泉の街が一望できる裏山に連れていかれた。見た情景を三十一文字にしよう、というのである。指折り作つた歌がどんなものだったか記憶にない。だが、草原にひっそり咲いていたリンドウの紫色が印象に残っている。それが、ことばで写生する対象の一つだ、ということとを教えられたためだろう。

新卒で勤めた国民学校（現在の小学校）は、石鎚山麓にある私の母校だった。そこで、有志とともに「せせらぎ短歌会」をたちあげた。会はせせらぎのまま大海に出ることもなく終わつた。けれど、敗戦後戦地や軍需工場から引揚げてきたたくさんの若者の、文化活動の広場になつたことは間違いない。その種をまいてくれたのが、前述したように上岡君である。

拙著『ぼくらの館長さん』という児童書の出版を、彼は心から喜んでくれた。そして、子どもたちに紹介し、その感想文を送つてくれた。うれしかった。

文化的な刺激とあたたかい励ましを、いつも送りつづけてくれた、上岡治郎君。その誠実で温厚な人柄はいつまでも私のなかに生きつづけるだろう。

川崎市麻生区百合丘  
215-0011  
三二二六八



愛媛大学・(財)白楊会館  
結婚相談所・MCC  
(Marriage Counseling Center) からのお知らせ

結婚相談してみませんか

♡素敵な出会いを♡

皆様の幸せな結婚を願っています。どうぞお気軽にご相談ください！多数のお申し込みをスタッフ一同お待ちしております！

申し込み手続きについて

●申込書 MCCにある用紙にご記入のうえ、身上書一部を添付してください。なお、申込書については、MCCにご請求ください。

●写真二〜三枚。

(一年以内に撮影したカラーでサービス版程度のスナップが望ましい。)

費用について

●申込金一万円、諸経費二万円(三年間有効)、計三万円が必要です。

これについては、同封の郵便局振込用紙を使用して振り込み、領収書を同封してください。なお、三年経過後の継続は、諸

経費の二万円を同様の方法で振り込んでください。

●お見合い費用は、双方のご負担と致します。

●結婚ご成立の際は、双方から二万五千円ずつ、計五万円をいただきます。

ご連絡は

毎週水曜日

午後一時から午後五時まで

電話番号 (FAX兼用)

(089) 923-7210

愛媛大学・(財)白楊会館

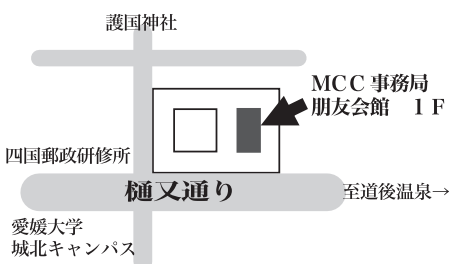
結婚相談所・MCC (Marriage Counseling Center)

〒790-0825

愛媛県松山市道後樋又十番十三号

TEL (FAX兼用)

(089) 924-7910



### シベリア慰霊追悼の旅



清家 政夫  
(昭三六卒)

八月十五日正午、全国戦没者慰霊追悼式を新潟国際空港ロビーのテレビ中継で見届けた後、私は二人の妹と共に四日間のシベリア慰霊追悼の旅に就いた。

「シベリアへお参りに行きたい」生前これが母の悲願口癖でしたが晩年は病に伏しその願いは適わず昨年春先に白寿で逝った。

何とか母の意思を叶えたく今回全国強制抑留者協会主催のシベリア戦没者慰霊訪問事業に両親の位牌を携えて私達は参加した。

父は昭和十九年十月二十二日召集され満州へ出征。二十年八月の終戦でシベリアのハバロフスクへ強制連行され、酷寒と飢餓のなかで重労働に服務し三重苦と闘うが昭和二十二年三月二十日ビロビヂャンという小さな田舎町の病院で四十歳の生涯を閉じた。



当時、私は小学校三年生、妹は五歳と二歳の幼子で二人は父の顔を知らず記憶もない。

幸いなことに、此度の慰霊追悼の旅では二人の元シベリア抑留帰還兵の方と共に同行することが出来たことである。

四日間、米寿の齢に近いこのお二方が六十余年前もの記憶をたぐり回想しながらハバロフスク地方の抑留地を巡回して慰霊追悼を営むことができ、その当時の抑留生活の状況や筆舌に尽し難い困苦の様相等を詳しく説明して聞かせていただいた。

正しく、「百聞は一見にしかず」の例えの通りで、私達は改めて亡き父の最期、終いの状況などについて知見し伺い知る事が出来た。父が一年七ヶ月の間、日々戦友と共に生き抜いた居住地。最後に入院していたとされる病院の跡地。そして埋葬されたと思われるその聖地に直面して、私達は唯々、呆然と佇み在りし日の姿を求めて暫し眺め見つめるばかりでした。「遅くなりました。やっと来ましたよ、父さん……」。父の霊が宿

る墓碑の前で私達は額き、父が出征した後のこと。母が苦勞して三人を育ててくれたこと。父の御加護のお陰で現在は皆が幸せに暮していることを涙ながらに報告して追悼の言葉とした。

そして、多分父も同僚と一緒に歌ったのであろう「異国の丘」の一節を内心で吟じながら戦没者の御霊の冥福と永遠の平和を念じ続けた。

今回、この旅に出て慰霊巡拝中そして帰国の機上でも私はずっと思い詰めたことは、日本は何故こんな戦争をしなければならなかったのか……。なにゆえに……。この思いは今も続いている。

シベリアでは六十万余の人が強制抑留され六万余の方が亡くなったと歴史は伝えている。

先人の言に「賢者は歴史に学び愚者は体験に学ぶ」と論じている。絶対に、絶対に、繰り返してはいけない真実、歴史である。

白樺に囲まれ眠る父の墓の辺風わたり萩咲きこぼれ 合掌  
(二〇〇八・八・二〇記)

宇和島市吉田町鶴間  
544



### 同期会

#### 愛媛師範学校 昭和二十二年卒業 第二十三同期会



島津 通幸  
(昭二二卒)

開催日 平成二十年十月二十二日  
会場 松山市 伊予鉄会館  
出席者 三十八名  
バスを降り高島屋上の観覧車に

一人、抜ける青空に響える松山城を眺め入学して第一回の日曜日に室員一同で登った日の事を想いながら会場に急いだ。既に同期生が多く見えていた。定刻十二時になつて記念写真撮影を済ませる。

光田比公代表の進行により一年間の物故者山本正弘氏外五名と九十一名に黙祷をささげる。白上正氏近藤隆光氏により、声高らかに校歌を斉唱、「浮華はとび、脈質実の音高し」我々の今日あるはこれかとも思う。

上原勲代表、「卒業後六十年、余り二十年を加えて今日、俺は生きていく」とお集まりいただき有難う」と歓迎の挨拶があり、白石幹事より弔慰金についての考察経過の報告や所感の説明があり、本会でその是非を論議して見る事にしてはとのことであったが、石丸

保君の「テーブル毎で話し合つて結果を事務局に報告しては」との提案に決まる。

今回県外からの出席者は三名で東京都の谷口敬氏と水野允陽氏の二名と広島県廿日市市の豊島睦氏の三名で遠路有難い思いで一杯。早速宴に移り、乾杯の発声は水野允陽氏が参会者の健勝を祈つて声高らかに言なつた。瀬戸内の味豊かな肴も盛られ酒宴に入った。

白石幹事提案理由について次の五項目があげられた。同期生が自然減っていくことで考えられる事  
①受ける人(奥さん)等が弱つておられる。  
②形式的になつてきている。  
③管内によつて中止している。  
④葬儀参列にかかる交通費が多かり弔慰金減になる。

⑤家族葬、密葬などで参列出来ない。飲み乍らグループ協議を行い事務







局に報告をした。  
一年が過ぎるのは早い、各グループを回りサービスにつとめる。

今年も光田氏から三宅先生の「把手俱行」の色紙をいただいた毎年のお心遣いに最敬礼である。ビール、酒、焼酎をやって「サービス」今焼酎をやっている「水割り半々、冬は湯割り」と言う人が増えている、中には「お茶ぞ」と求める。それぞれ健康保持に心がけている年ごろか。

豊島陸氏には今年も「越前・若狭八景」の詩集をもらった。見る人によってこんなに変わるものかと驚くばかりお礼を言う。「昔、長浜から自転車で行き日帰りだった」という話ももらったりした。

瀬野氏も「新卒の折小田町参川小に赴任していた頃の学校と最近行った学校が木造から鉄筋に、場所が反対になって驚いた」とか、竹田寛氏北条の昔など調べているとか田中久雄氏高橋久二男氏等多士済々西条クラブ一奉仕で外出の時見た時計宝屋高瀬商店主敏明氏健在であった。

あれこれ話は尽きない。門屋映章氏には久々に会え嬉しかった。白石氏の奥様と小生の妻が女学校同期生とのことでよろしく伝言サービス回りの間に「元気でやりましょう」と願いをこめた。

三時近くになり光田氏から報告があり、「弔慰の件は各グループ共自然消滅の形になるとの事で以後集金はしない」と決める。

松浦氏より岩瀬延雄氏の近況報告があり、原広氏不参の詫びに奥様が来られた事も報告された。

命を懸けた名古屋勤労動員大府駅前での今は亡き秦氏の見送りの舞今も思い出す、私は召集電報が迷って隣りのアリアンの寮に行っていたとの事で一人淋しく大府から善通寺へ朝着、母が出口で「昨夜から待っていた」と、親とは……「ああ紅の血は燃える」全員で声高らかに歌いあげ、豊島氏の発声萬歳三唱し再会と健勝を約し写真を取り西へ東へ会場を後にした。

(☎) 791-3522 喜多郡内子町二九〇二



### 無念の「四五会」

#### 有終の記



大野 政宣  
(昭二三卒)

この夏は酷暑干天。  
さて、前年の申し合わせにより、「四五会」(四五組同期会)の最終会が開かれた。

平成二〇年七月二十八日、道後「にぎたつ会館」、十一時受付開始、写真撮影、入浴と談話。午後一時懇親会と進んだ。

世話役藤原昭二さんの司会で、この一年の物故者森春雄先生、青木倉男、平野皓二さんの御霊にご冥福の黙祷を捧げる。

卒業生九三名、物故者三一名、不明者三名。まさに光陰人を待たずの感深まる。

続いて世話人代表玉井思さんの挨拶。

開口、暑中の参加者をねぎらって「無念」(織田信長による寺の火攻めで焼死した快川和尚が発したという「心頭滅却すれば火も自ずから涼し」)の心境での参加ではとの謝意を込め、開会に携わった明神綱市・井上篤さん外に謝辞が述べられた。

「四五会」は平成元年七月二十七、二十八日、今治地区で四四名の参加を得て発会(参加率四五%)。以来、今回で二十回を重ね、参加率は毎回平均三〇%、参加数は二八名を下ることなく、今回は二一

名、三五%の参加を得ての素晴らしい集いを見たのは各地域の世話役はもろろん、会員の「無念」の心境での会に寄せる思い、絆あればこそと回想。これからもさらなる健康長寿を願い誓った。

次いで、発会以来今回まで連続参加者高木亀夫・明神綱市さんの表彰、地域高齢者福祉活動功労者知事表彰受賞本宮敏治・地方教育行政功労の文部大臣表彰受賞森岡敏さん。明石寺(住職明石孝澄氏こと古谷隆三さん)の九建造物が県で初めて国の登録有形文化財指定となる等のお披露目に同慶拍手を贈る。

また、富田一抱氏こと富田恒夫さんからの得難い揮毫色紙を参加者一同に配付していただき、さらに故森先生や渡邊雄幸さんから金一封を、世話役の方からは記念品を頂戴する等、慶弔混じって話題を広げた。

世話役門岡武雄さんの「乾杯」の発声で宴に入り、懇親談話は佳境に至り、その盛況はまさに北宋の詩人韓維の「下仲謀八老会」の詩境を彷彿させた。すなわち、

同榜同僚同里客 斑毛素髮入華筵  
(同榜同僚同里の客) (斑毛素髮華筵に入る)  
三盃耳熱歌聲發 猶喜歡情似少年  
(三盃耳熱して歌聲發) 猶喜歡情の少年に似たるを

三時ころ、  
酣宴を閉じ、  
井上篤さんの  
指揮よろしく  
校歌を斉唱。  
全歌章の一語  
一語を噛みし  
めるように力  
強く唱い上



げ、会場に響いた。  
山本正廣さんの発声で「万歳三唱。」雰囲気は最高潮に達し、余韻を残す中、本宮さんの閉会挨拶すべてを終えた。

なお、この最終回で「四五会」解散後も新しい集いの会が発足することになり、新会長に富田恒夫さんが当たる。名称、内容、運営等新規の会が期待される中散会した。  
※違い別れ重ねて先の虹を待つ。

小クラス会



龍山 敏子 (昭一九卒)

平成二十年七月五日、急遽、途絶えていたクラス会を再会することになり、南予から三名、中予からも三名、計、六名が、松山駅前のキスケボールに落ち合いました。他に予定していた二人もありましたが、急に来れなくなり、六名でクラス会をしました。

まず、キスケカラオケボックスで、予約していたお弁当を頂きながら、久しぶりの再会で、話したり、歌ったりして、旧交を温めました。

写真の順に書きます。

矢野アサ子さんは習字の大家で、県展、洗心展、松山聿友社中展に出品しておられます。週一回、四、五人で文化センターで勉強会もしておられます。デーサービスにも週一回通って、機能回復と、お楽しみ会に参加をしておられます。

金子六女さんは、俳画、煎茶、謡曲、仕舞など高尚な趣味をしておられます。来る十月には宇和島の南予文化会館で「江口」のお仕事をされるそうです。

中村一子さんは、畑の手入れと、毎日お数を作って友達と交換しておられます。

川崎艶子さんは、老人会の副会

長。大正琴を十名程週一回教える、大正琴で慰問に行く等お忙しそうです。畑で野菜も作って、友達などにあげているそうです。

青井富恵さんはお習字をしたり、島でお花を作ったりしておられます。ご主人はご病気がお悪いそうです、大変です。

龍山敏子も趣味など五つ（からおけ、煎茶、着付、ごえいか、ライオンズクラブ）しています。

私達は、八十四歳位になります。これも昭和十九年までの五年間、母校で勉強させていただいたお陰



と、感謝でいっぱいです。皆、大病は持っていますが、元気で暮らしています。

再会を期して、三時間位でミニクラス会を閉会しました。これからも、小規模でもいい、手軽なクラス会をして行きたいと話合いました。短い時間でしたがお互いに元気をもらって家路につきました。

会にこれなかった中川マツ子さん、高橋静さんは、先の六人の上を行く逸物です。根来秋子さん、森川繁子さん、稲葉トキ子さん、蒲池恵美子さん（文学者）宇高佐知子さん、二宮静子さん、新田ノブ子さん、加藤キヌ子さん、その他の方々も皆さん凄いです。

「元気で皆さんにお会い出来る機会に恵まれますよう」祈念して筆を置きます。

798-0045 宇和島市大超寺奥 乙六八一二

十回目の二九の会



小野植元幸 (昭二九卒)

現職時代、東・中・南予と会場持ちまわりでの同級会だったが、年々現場が忙しくなり中断していたが、京口和雄兄のなみなみなら

ぬ努力により、六十五歳となるのを機会に、平成十一年八月二十三日（日）道後プリンスホテルにて、六十六名の出席で開催スタート。この時「毎年開催しよう」という気運が高まり、それ以来実施している。八月第四日曜と決定していたが、二年に一回の愛大同窓会と重なるので、三回目より期日変更し、六月第二土曜日と決定した。

本年は、十回目を去る六月十四日（土）午前十一時半より伊予鉄会館にて開催し、当初五十二名だったが、四名欠席し四十八名。

当日は、喜多郡三名が一番のりで、十時すぎ会場に着き、友人、家庭の近況交換。

年々高齢になり、雑談の中で黄泉へ近づく寺関係のあれこれ話している、続々と出席者が来て、握手や挨拶ではじまる前から学生にかえり賑やか。何十年も会っていない神奈川、大阪、広島からも参加。

十二時間開会。毎年のことながら写真撮影。大勢のため「ならば方」「顔がうつらない。」と時間がかった。

やつと開会挨拶森慎一郎兄の遠来参加者の乾杯が始まった。半数が女性。男性の中には体調が悪いといって酒が勧めず、美味しい料理も残す始末。後期高齢者の仲間入りして、酒豪が多かった者も年々酒の量がへって、お茶ですます者も多くなっている。話の中心は健康のことが多く「煙草をやめた。」「酒は飲めない。」等、学生

時代の元気は、どこへという人が多くなった。健康を保つ方法をあれこれ情報交換。自分がやっていることを話し、友人の健康方法を聞いた。私は、一に油物をひかえる。二は、野菜を食べる。三は、魚貝類を食べる。三度に三度「蜜柑」を常食。毎日歩き、「早寝早起」の実行。同級生といっても戦後の混乱期。子供が多く教師が不足し代用教員で先生を確保したため、他職業から進学した人もあり、八十代の人もある。話がはずみ、二、三歳年上の人でも遠慮なく話すことができ、生き方を学んだ。話はずみ、学生時代にかえり「おい、おまえ。」の方言まるだし、学生時代のエピソード、思い出を語り合い、参加者の楽しい顔々々。

途中より、カラオケで鍛えた美声の松浪不二夫君が懐かしい演歌で会場を盛り上げてくれた。宴会の二時間は、あつという間に終り「来年も出席を」と再会を誓い散会した。

本年は、黄泉の世界に行った者がなく、また来年の再会に、一名も黄泉の世界に行かないようお願い帰途に着き、楽しい一日で思い出のページとなった。





# 教育学部から教育の現場へ

## 愛媛大学教育学部では、「理論と実践の往還」を軸にした実践・省察型カリキュラムに再構築

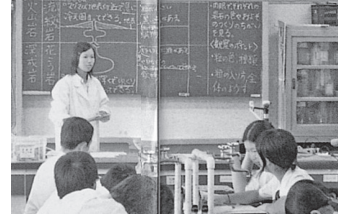


**4年次 応用実習・他校種実習**

4年生では、公立校での実習を通して教科指導力や生徒指導力を向上させたり、学校種の異なる学校で、子どもの発達を深く理解します。

**3年次 教育実習**

3年生では5週間、附属校園で教育実習を行います。一人で教壇に立って、授業や学級をまとめます。

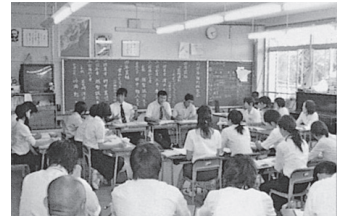


**2年次 ふるさと実習（教育実践体験実習）**

2年生では、ふるさと（出身校）で、教師の仕事全般を観察します。授業だけでなく、学級経営や放課後の部活指導など、教員という職業を直接肌で感じます。

**2年次 プレ教育実習（実践省察研究Ⅰ）**

来年の教育実習に向け、3年生の姿を観察して、授業の構成や教材研究の方法を身につけます。



**1年次 観察実習**

1年生では、附属校園などで、授業や子どもの活動を観察します。授業を受ける立場から授業をする立場へと、授業の見方を変えていきます。

### 「愛媛大学教育学部サポーター制度（仮称）」 導入による学生支援活動が始動する

本制度は、教育学部の同窓生を中心に「愛媛大学教育学部サポーター（仮称）」として登録をいただいたが、教育学部の学生を多方面から支援していただくことの試みで始めた制度です。

当面は、緊急のこともあり、今直ぐ広くサポーターを募集することは難しいことなので、サポーターとして登録願う方法として、先ず教育学部で課題となっている事項について講座として取り上げ、順次講座を開設し、その講座の趣旨を十分達成させて頂ける講師にサポーターとして登録をお願いしています。将来的には、教育学部を退職された教職員等教育学部に縁のある方々までその輪を広げ、充実した制度にしていこうと、学部あげて積極的に取り組んでいます。

その第一弾として、「魅力的な話し方講座（仮称）」を来年度開設し、その講師として「第一期サポーター」として登録を願っています。

現在、教育学部は、教育目標の中で次のことを掲げています。

- 教育活動に取り組むため、高い技能を身につけて、豊かな表現力を修得する。
- 専門的職業人としての使命感と多世代にわたる対人間

関係能力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。

また、教員養成をとりまく課題の一つとして、「魅力的な授業のつくり方」とか「生徒、保護者とのコミュニケーション能力の向上」が問われており、教員志望でない学生にとっても、地域のリーダーとして、組織の中核として活躍するには、「対話力」、「プレゼンテーション能力」を含めた魅力的な話し方を修得することが不可欠になってきています。

そこで、現在在は各界で「話術のプロ」、「授業のエキスパート」、「組織のリーダー」等として活躍されている方々を講師として招聘して、目標達成できるよう支援を願って同窓生を中心とした講師に交渉中とのことです。

- 現在、サポーター登録者として
- ・ダイキ株式会社  
代表取締役社長 佐藤 一郎 氏
  - ・南海放送株式会社  
アナウンサー 合田みゆき 氏
  - ・落語家 真打ち 古今亭菊志ん 氏
- がいらっしゃいます。

# 愛媛大学オープンセミナー in 東京 (教育学部主催) が開催された

平成二十年十一月十六日(日)、



東京都港区芝浦にあるキャンパスイノベーションセンター一階国際会議室で教育学部主催の

「愛媛大学オープンセミナー in 東京」が、校友会首都圏支部の全面的なバックアップにより盛大に開催されました。



この催しは、愛媛大学各学部の活動を広く首都圏の皆様にお知らせするため、定期的に開催されるもので、今回は七月に法学部が担当し、今回は、教育学部が担当となつて実施し、校友

会員でもある教育学部同窓会関東支部の方々多数の参加を含め、約七十名に近い人々が聴講しました。  
今回のセミナーでは、高橋宣昭教育学部事務課長の司会で、まず、壽卓三教育学部長が、「教育学部の教育研究活動の紹介」をテーマに、新時代をリードする人材育成を目指す教育学部の紹介を、  
・ 地域と共に育ち育てる教育実践力  
・ 地域創成研究センター  
・ 愛媛大学総合型地域スポーツクラ  
に視点をおき、説明されました。続いて、山崎哲司教授が、「教員養成教育の質的向上に取り組む

カリキュラム改革」と題して、教育学部から愛媛大学全体の改革【教育GPに採択】に向けて、  
・ 大学教育研究機関について  
・ 教育学部の教員養成教育について  
・ 成果を愛媛大学全体の教員養成へ



の三点に絞り、教育学部で進めている特色のある実践カリキュラムの紹介と、全学的教員養成改革について、プロジェクトを駆使して、実に明快なプレゼンテーションが展開されました。  
特別講演として、佐藤栄作教育学部教授による、「幻の方言」～『坂の上の雲』の松山ことばから～と題して、『坂の上の雲』の松山ことばは一体誰のことばなのか。虚子からの引用は、明治の松山方言といえるのか、他はどうなのか等について、推定するしかない過去の方言の実像と、文芸上の技巧としての方言、ともに幻というほかない。として、

資料を豊富に使い、この二つの幻の方言に迫っていった講演は、なるほどと、聴講する我々を発見的で感動的な気持ちにさせるアカデミックで、大変興味深い講演がありました。  
講演後の質問コーナーでは、「なもし」ことばを中心にして、一般の方々からの興味深い質問があり、白熱の議論の一時がありました。  
講演内容につきましては、愛大教育学部のHPをご覧ください。

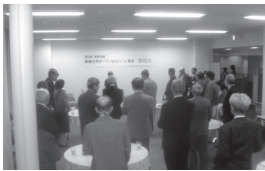


懇親会では、教育学部同窓生でもある、東京を中心に大活躍している、落語真打ち、古今亭菊志んさんの高座が開かれ、会場が笑いの渦に巻き込まれ、和気藹々の雰囲気の中で盛大な懇親会へと移っていきました。  
懇親会では、

セミナー修了後、会場を五階のリエゾンコーナー五〇一号室に移動し、懇親会が開かれました。



故郷の味、鯛の塩焼きに舌鼓を打ち、懐かしい芋炊きの味に故郷の話題が湧き起こり、笑顔笑顔の中、楽しい情報交換ができました。  
また、同会場五階で、「愛ががある『愛媛物産展』と銘打った同時即売会」が開催されていまして、約五時間程の間に七百名近くの方々物が物産展を覗かれ押すな押すなの大盛況でした。





### 愛媛大学校友会首都圏支部臨時総会と

### オープンセミナーに出席して



武田 敏文  
(昭二三年卒)

愛媛大学校友会東京支部結成の準備会の時、「教育学部は横の連絡が足りない。」と言われたことを思い出し、平成二十年五月十一日(日)に、今年体調も良かったので、田町駅前の東京都港区芝浦三三三六のキャンパス・イノベーションセンターで行われた平成二十年度愛媛大学校友会東京支部臨時総会に出かけました。

昨年の総会には、愛媛大学教育学部平成六年卒の山口直樹さん(芸名：古今亭菊志ん)が招待されて落語口演をしてくださいました。そこで名前の変わった「首都圏支部」の役員として理事を引き受けていました。今回は月一回の口演日と重なり、欠席されました。

代わりに愛媛大学教育学部昭和三十三年卒の佐藤全良さんが出席

して下さいました。この機会に、同窓会報の中継発送をお願いしたら、山下正洋さん(愛媛青年師範昭和二十三年卒)同様引き受けてくれました。続いて、懇親会に行こうとしたら、重見法樹さん(愛媛師範昭和二十五年卒)と出会い、著書の「戦後教育の原点を守るのは誰か」をいただきました。

さて、当日は午前十時より愛媛大学理学部長の御挨拶の後、入船徹男・井上徹、山田容子の諸先生の御講演を伺いました。

午後一時より 臨時総会  
首都圏支部と改名 他 事業  
計画の承認

その後特別講演があり三土修平・溝端光雄先生よりお話をお聞きしました。

次いで、第五回愛媛大学オープンセミナーin東京が平成二十年十一月十六日(日)に開かれ、松山から菅田顕常任幹事さんのお声かけもあって、教育学部関係の兼頭吉市さん(愛媛師範昭和二十年

卒)・山之内登さん(愛媛師範昭和二十二年卒)・山下正洋さん・森孝枝さん(教育学部昭和三十八年卒)・月原恵子さん(教育学部卒)の皆さんが出席してくれました。

会は教育学部長の壽卓三先生の「教育学部の教育研究活動の紹介」と題された御挨拶に始まり、山崎哲司先生の「教員養成教育の質的向上に取り組みカリキュラム改革」のお話に、若き日の地方実習を思い出しました。



特別講演では佐藤栄作先生の「幻の松山方言」が興味深く、松山方言の「なもし」と東予方言の「のもし」が、それぞれ独立していることに、かつての疑問がとけました。

古今亭菊志んさんの「目黒のさんなま」の落語を聞いて懇親会に移り、兼頭さんが同窓会関東支部長を、山下さんが副支部長を、私が副支部長兼事務局担当と分担しましたので、今後いつその会の充実に努めたいと思います。

331-0063 さいたま市西区  
プラザ八一四

### 祝・叙勲

(平成二十年十一月三日)

#### ☆瑞宝双光章

教育功勞 大野 久志 殿

松山市高井町一四〇一  
昭三十六年卒

教育功勞 沖原 功夫 殿

松山市小坂五一五二四  
昭三十五年卒

教育功勞 仙波 弘子 殿

松山市水産町九一九  
昭三十三年卒

教育功勞 渡部 平人 殿

松山市平井町一三三三二  
昭三十五年卒

教育学部同窓会  
インターネット  
開設しています!

メールアドレスは上記

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

[dosokai@ed.ehime-u.ac.jp](mailto:dosokai@ed.ehime-u.ac.jp)

教育学部同窓会  
ホームページ完成!

URLは上記

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~dosokai/>

支部活動、会合、イベント等のスケジュールなど、タイムリーに情報をお知らせします。

同窓会員同士の交流を深めるために、できれば、掲示板を設ける準備をしています。



# はばたけ伊予の子

## 伊予地区児童・生徒の 芸能・文化活動発表会を終えて



松尾多美子  
(昭四七卒)

思い出してみると支部活動「はばたけ伊予の子」の起りは八月の同窓会懇親会の席から始まったように思う。「伊予支部の活動として子どもたちのいろいろな種類の発表会をしてみようと思うのだけれど、どうだろうか。」と言われた。酒の勢いで、私は「それはいいですね。」と答えたことを覚えている。今振り返ってみると、決して本心ではなかった。実行することは容易ではないとそのとき、直感的に感じていたからである。

慌ただしい日々を過ごしていた九月のある日、「子どもたちの発表会の準備会をしたいのだが」という連絡があった。日々の学校での仕事を考えると、この発表会をするのは、かなりの困難を伴うことが目に見えていた。本当に

洪々、第一回の準備会に出席したのである。この日から大変な日々がスタートすることになる。

私は、手始めに、学校では発表の場のないお稽古ごとをしている子どもにも声を掛けてみた。子どもへの反応が知れたかったのである。「松前町のホールでいろいろな種類の芸能・文化活動の発表会をしようと思うのだけれど、出演してくれる？」と問いかけてみた。そして、「実現するかどうかは分からないのだけれど」と付け加えることも忘れなかった。



何日か経ったある日、一人の保護者が、私に問いかけたのである。「先生、あのお話どうなりましたか？」一瞬何の話か分からなかった。子どもの反応が知りたくて問いかけた言葉が、保護者の耳に届いていたことに驚いたのである。このような出会いを通して、羽ばたけ伊予の子の実現のために力となつて働いてくれる人物が、一人また一人と集まつて来たのであった。

さて、支部活動として、なぜこの様な子どもの発表会をしようと考えたか。このことから説明しなければならぬだろう。まず、私たちは教育学部出身者である。故に教育を抜きにした活動では意味がないのではないか。学校に直接関わるのではなく、子どもを育てるために役に立つことはないか。各お稽古ごとの発表会はあるが、あらゆるジャンルの合同の発表会はしていない。自分が習っているお稽古ごと以外のことを知ることは、子どもの視野を広げ、個性を伸ばすことにもつながっていくのではないか。「教育の日」に関わる行事としても意味があるのではないか。同窓生自身も作品展示に参加することによって文化的な活動の場が広がるのではないか。このように考えた訳である。こうして、私たちの苦悩の日々が始まった。

最初に行なったことは、伊予地区の校長にこの発表会の趣旨を分



かつてもらうことである。愛大同窓会主催というところがやや引つかかるといふ人もいたが、子どもに発表の場を提供するというところで協力をしてもらうことができた。ここで、出演者を募集するチラシを各学校に配布した。これに合せて、同窓生に作品展示のチラシを配布し呼びかけを行なった。出演者が出てくれるか、出品者がいるか、ハラハラ、ドキドキの何日かが過ぎる。締め切りになった。やや少な目である。しかし、この後、締め切りを過ぎて、続々と出演申し込みが出てきたのである。結局予定時間を、三十分延長し、二十一組約百名の出演となった。当日は、午前中リハーサルを行ない、午後本番を迎えた。舞台裏では、バレエ用のリノリウムを敷き、新体操用のマットを敷き、音響のための、反射板を下ろし、ピアノを運び、それぞれの出演者に合わせて道具を運びと目の回る様な忙しさであった。幕間が一分遅れると三十分遅れると心配していたが、運営委員の協力により、予定どおり一分の遅れ

もなく順調に進んだ。多くの観客を動員し盛会に開催することができた。同窓会から支部活動費をいただき、さらには、奥定同窓会長様のご挨拶もいただき「はばたけ伊予の子」を無事終了することができた。

出演者から、「他のジャンルの人が頑張っているのを見て大いに刺激を受けた。」とか、アンケートの感想の中に「伊予地区の小中学生の表現の場がもたれたことは大変意義深いことだ。」「来年も盛大に開催されますよう大いに期待しています。」という言葉をみつけ、この支部活動も意義があったのかなと思ひ、この数ヶ月の苦勞を忘れていた私であった。

(☎) 799-3125 伊予市森六三七





# はばたけ伊予の子

H20. 12. 14

## 伊予地区児童・生徒の芸能・文化活動発表会





# 学部トピックス

## 一回生の大西さんが「振り込め詐欺」被害防止ポスターを作成しました

愛媛県警察本部から教育学部への要請で、教育学研究科美術教育専修一回生大西哲矢さんは、ポスター及びチラシ「注意 振り込め詐欺があなたを狙う！」を作成し、平成二十年七月二十二日（火）教育学部長室で愛媛県警察本部生活安全部長 客孝由氏及び社団法人愛媛県防犯協会連合会専務理事 松本倭氏に贈呈しました。これらのポスターは県内金融機



## 教育学部四回生澤原行正さんが大阪国際音楽コンクールで第三位入賞

平成二十年十月十一日（土）茨木市のクリエイティブセンターホールで第九回大阪国際音楽コンクールが開催され、教育学部学校教育教員養成課程音楽専修四回生の澤原行正さんが声楽部門 [Age-U] \*-\*-\* 関の店舗及びATMの設置場所に、また県内高齢者約十三万世帯にチラシが配布されました。



オペラコースで第三位に入賞しました。同部門は、予選を勝ち抜いた二十九名（内外国国籍八名）のうち、棄権六名を除いた二十三名で争われ、上記の成績を収めました。今年も、声楽の他にもピアノ、弦楽器、管楽器、民族楽器、アンサンブル等の多くの部門でコンクールが開催されました。

このコンクールは、二十一世紀を迎え、大阪より発信される音楽文化が、世界の人々の心を潤し互いの多様性を認めながら争いのない世界平和へと貢献していくことを願って、全世界に羽ばたく多くの若い音楽家を見いだし送り出したいとの趣旨から設立され運営されているコンクールです。

## 教育学部長ほか一行がフィリピン大学教育学部・学校園を訪問

平成二十年十一月二十五日から二十七日にかけて、教育学部長ほかがフィリピン大学教育学部、フィリピン大学幼稚園・小学校・高等学校を訪問しました。



壽教育学部長とヴィヴィアン・タリサリヨン フィリピン大学教育学部長

愛媛大学教育学部とフィリピン大学教育学部は昨年十二月に学術交流協定を締結し、交流を行っています。平成二十年十一月二十五日から二十七日にかけて、壽卓三教育学部長、隅田学准教授、高橋事務課長、徳永総務チームリーダーが、フィリピン大学教育学部、フィリピン大学幼稚園・小学校・高等学校を訪問しました。セルヒオ・カオフィリピン大学

ディリマン校長、ヴィヴィアン・タリサリヨンフィリピン大学教育学部長、オローラ・ズニガフィリピン大学幼稚園・小学校・高等学校長らと、現在進行中の愛大G P「フィリピン大学との連携による国際的な教育人材の育成」や今後の学術交流について活発な議論が行われました。

フィリピン大学幼稚園・小学校・高等学校では、英語や理科の授業を観察し、主任の先生方と意見交換を行い、子どもたちの実態やカリキュラム、教育環境について情報収集を行いました。

滞在二日目の夜には、これまで日本の教育見学団として愛媛大学を訪問した大学院生や教員等が三十名以上集まり、歓迎会が催されました。短い滞在期間ではありましたが、心温まる充実した交流を行うことができました。



これまで愛媛大学を訪問した大学院生や教員などによる歓迎会



会報送料・寄付者名

平成20年6月～12月

三石岡菅阿城藤増池大永北小宮堀井山之大兵篠桐野藤河相花大山  
好丸村原佐戸原田上城井田室崎本原之内黒頭崎田寄井野田房野田  
環澄吉サヨミツギ榮子(名誉教授)元カズ子照富久英昌茂美和英孝全達秀孝久ミサト  
子子彦子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子

寄贈図書



「心に残る先生」

寄贈者・著者 三好 賢祐

B5横三つ折り 一四五頁

発行者 瀧幸 勝也

編集発行 愛媛新聞サービセンター  
生活情報出版部

※二十冊贈呈あり、希望者には無料で贈呈送付します。



「大豆論巧」

寄贈者・著者 越智 猛夫

A5版 一八九頁

発行者 越智 猛夫

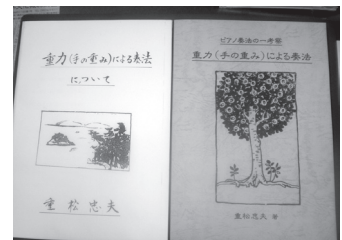
発行所 地域文化研究所

その他 地域文化研究所における研究報告書

「門外漢の仏典ノート」

「醍醐灯由来の追究」

※ 貸出可



「重力(手の重み)による奏法」

「ピアノ奏法の一考察」(DVD付)

贈呈者・著者 重松 忠夫

B5版 四三頁

発行者 重松 忠夫

※ 貸出可



「理科の授業づくり入門」

「玉田泰太郎の研究・実践の成果に学ぶ」

贈呈者 武田 敏文

編集著者 「理科の授業づくり入門」編集委員会

B6版 五八三頁

発行者 山田 雅彦

※ 貸出可

会報の送料納付について

平成二十年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。  
出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一ケ年五〇〇円で、二ケ年分ずつ収めるようになっております。

②二年ごとの更新は、煩いので、何ケ年かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四

送り先 〇七九〇一八五七七

松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

敬 弔

(物故会員)

20 ・ 8 ・ 6	20 ・ 8 ・ 3	20 ・ 7 ・ 24	20 ・ 7 ・ 21	20 ・ 7 ・ 19	20 ・ 7 ・ 14	20 ・ 7 ・ 6	20 ・ 7 ・ 6	20 ・ 7 ・ 2	20 ・ 7 ・ 2	20 ・ 6 ・ 30	20 ・ 2 ・ 6	20 ・ 6 ・ 21	20 ・ 6 ・ 19	20 ・ 6 ・ 7	20 ・ 6 ・ 1	20 ・ 5 ・ 6	19 ・ 12 ・ 30	(死亡年月日)	
佐々木 (昭24・青師)	長井敏昭 (昭30・愛大)	本山定男 (昭23・本科)	間部茂一 (昭25・本科)	堀井恭式 (昭5・本科)	西山富次雄 (昭50・愛大)	森恵美子 (昭24・愛大)	岡田行正 (昭18・教養)	井上トヨ子 (昭7・本科)	大原忠明 (昭29・愛大)	平松義晴 (昭18・本科)	平野皓二 (昭23・本科)	後藤ツヤコ (昭4・本科)	袋瀬公夫 (昭20・本科)	井出弘 (昭8・本科)	熊義一 (昭2・乙種講)	杉原良宣 (昭19・本科)	関家仁寿 (昭13・本科)	(氏名)	
20 ・ 10 ・ 24	20 ・ 10 ・ 15	20 ・ 10 ・ 15	20 ・ 10 ・ 13	20 ・ 10 ・ 11	20 ・ 10 ・ 11	20 ・ 10 ・ 6	20 ・ 10 ・ 5	20 ・ 9 ・ 26	20 ・ 9 ・ 21	20 ・ 9 ・ 16	20 ・ 9 ・ 12	20 ・ 9 ・ 7	20 ・ 9 ・ 4	20 ・ 9 ・ 1	20 ・ 8 ・ 29	20 ・ 8 ・ 28	20 ・ 8 ・ 18	20 ・ 8 ・ 8	20 ・ 8 ・ 7
越智潔 (昭19・本科)	倉橋隆伸 (昭16・教養)	栗田邦夫 (昭29・愛大)	岩崎隆志 (昭12・本科)	高村節子 (昭17・本科)	近藤陸王 (昭16・教養)	石田廣 (昭23・本科)	伊藤博 (昭13・本科)	合田清 (昭30・愛大)	尾崎和也 (昭20・青師)	光宗悟 (昭12・本科)	矢野寿久 (昭15・本科)	石原文 (昭16・本科)	武田兼夫 (昭15・本科)	岩城忠 (昭19・本科)	坂上肇 (昭15・本科)	高橋真壽子 (昭26・愛大)	山崎孝志 (昭13・本科)	矢野高宣 (昭17・本科)	徳永賢 (昭17・本科)
20 ・ 12 ・ 22	20 ・ 12 ・ 17	20 ・ 12 ・ 15	20 ・ 12 ・ 14	20 ・ 12 ・ 11	20 ・ 12 ・ 10	20 ・ 12 ・ 8	20 ・ 12 ・ 7	20 ・ 12 ・ 5	20 ・ 11 ・ 26	20 ・ 11 ・ 25	20 ・ 11 ・ 24	20 ・ 11 ・ 20	20 ・ 11 ・ 21	20 ・ 11 ・ 17	20 ・ 11 ・ 7	20 ・ 10 ・ 28	20 ・ 10 ・ 28		
妻鳥克寛 (昭22・本科)	高市長 (昭20・本科)	菅原功 (昭13・本科)	青野太一 (昭13・本科)	河野陸郎 (昭12・本科)	檜垣武憲 (昭30・愛大)	重政謙一 (昭17・本科)	正岡了 (昭22・本科)	稲垣文子 (昭6・本科)	森良雄 (昭11・本科)	中村寿孝 (昭30・愛大)	藤井明雄 (昭7・本科)	大野慶一 (昭25・本科)	仙波繁代 (昭2・本科)	真鍋美男 (昭18・本科)	田中宗雄 (昭12・本科)	清家武子 (昭23・本科)	国貞哲郎 (昭23・本科)		

放送大学平成二十一年度  
第一期入学四月生募集!

放送大学では、平成二十一年度第一期の学生を募集中です。

放送大学はテレビ等の放送を利用して授業を行う通信制の大学です。

心理学・福祉・経済・歴史・文学・自然科学など、幅広い分野を学べます。

働きながらの大学卒業やキャリアアップ、退職後の生きがい作りなど、様々な目的で幅広い世代、職業の方が学んでいます。

○ 十五歳以上の方なら、一科目から学習する選科履修生・科目履修生として入学できます。

○ 十八歳以上の大学入学資格をお持ちの方なら、無試験で全科履修生として入学

でき、四年以上在学して百二十四単位を取得し卒業すると、学士(教養)を取ることができます。

○ 一つの分野を体系的に学びたい方には、「放送大学エキスパート」を実施しています。

さらに専門的に学びたい方には、大学院も併設しています。

資料を無料で差し上げたいです。お気軽にお問い合わせください。

資料請求・お問い合わせ先  
放送大学愛媛学習センター  
☎〇八九九三三八五四四  
<http://www.u-air.ac.jp>

募集期間  
二十一年  
二月二十八日まで